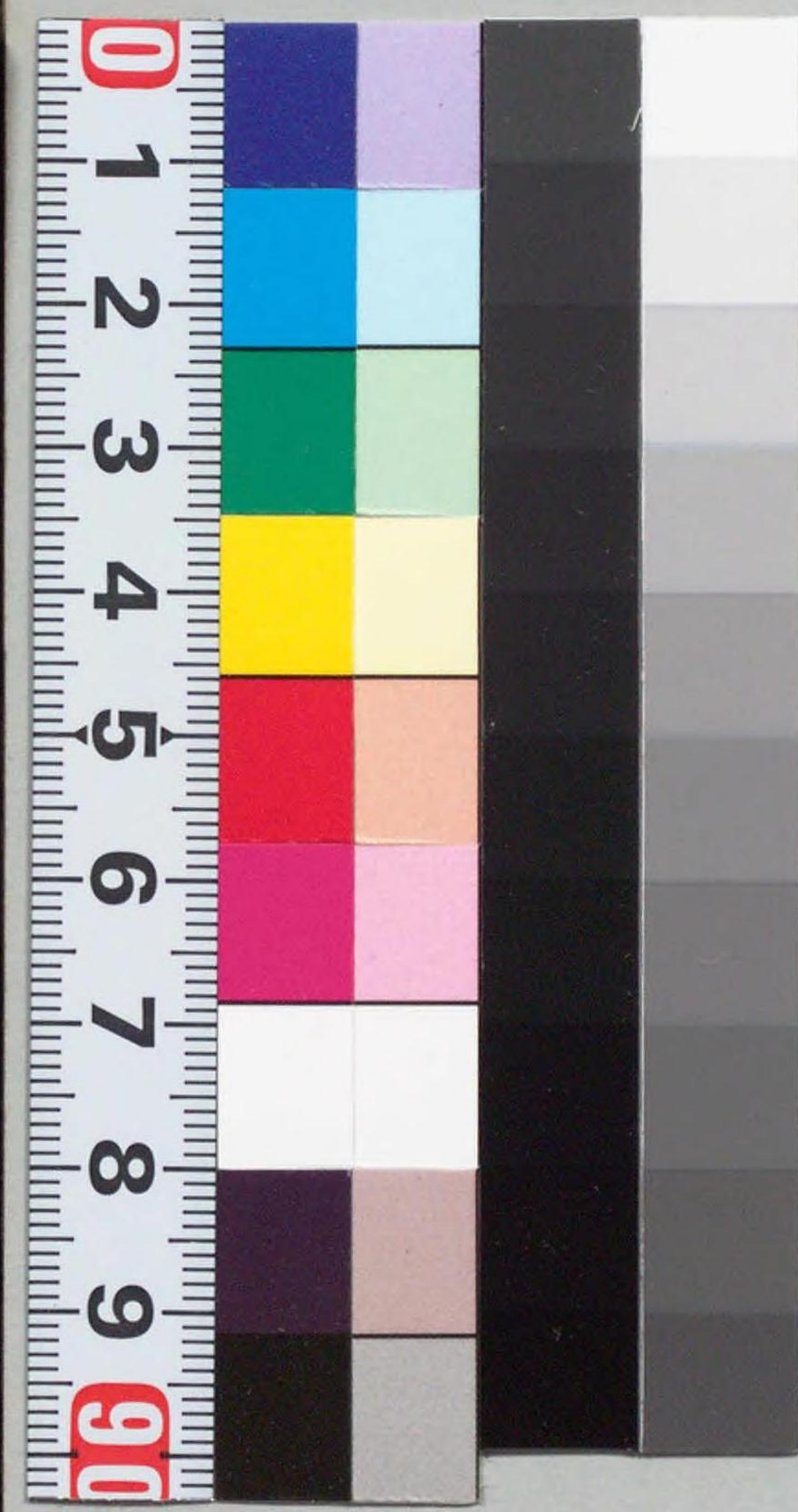


995
~~K~~
97

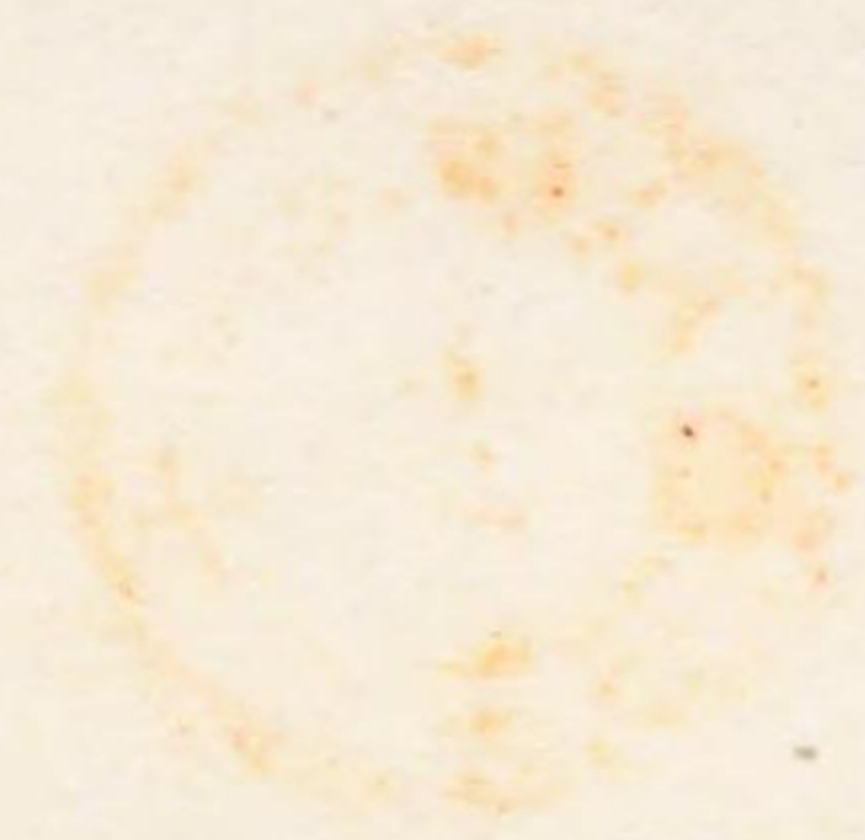
未明童話選集

海から来た使



使來海

小川未明著
解説・山内秋生





海から来た使



著者 松本 義介
主 松本 義介・繪



995
97

目次

海から来た使……………五
絲のない胡弓……………二五
蝶と三つの石……………三
青いランプ……………五一
二度と通らない旅人……………七一
時計のない村……………九二

平原の木と鳥……………一〇五
頭を下げなかつた少年……………一九
青空の下の原っぱ……………一三三
その日から正直になつた話……………一九五
町はづれの空地……………二〇九
ある夏の日のこと……………二三二
解 説……………三九

未明童話選集

海から来た使

海から来た使

人間が、天國のやうすを知りたいと思ふやうに、天使の子供等は、どうかして、下界の人間は、どんなやうな生活をしてゐるか、知りたいと思ふのであり

まゝ。
人間は、天國へ行つて見ることはできませんが、天使は、人間の世界へ、降りて來ることができるのであります。

「お母様、どうぞ、わたしを一度下界へやつて下さいまし。」

天使の子供は、母親に頼んだのであります。けれど、お母様は、容易にそれをお許しになりませんでした。

なぜなら、人間は、天使より野蠻であつたからです。そして、我が子の身の上は、どんなあやまちがないとも限らないからであります。

「どうぞ、お母様、わたしを一度下界へやつて下さいまし。」と、幾度とな

く、その小さな天使の一人は、お母様に頼みました。

毎夜のやうに、地球は美しく、紫色に空間に輝いてゐました。そして、その地球には、天使と同じやうな姿をした人間が住んで、いろいろな、それは、天使達には、ちよつと想像のつかない生活をしてゐると、聞いたからでありました。

「それほどまでに、下界へ行つて見たいなら、やつてあげないこともないが、しかし、一度行つたなら、三年は辛抱して、この天國へ歸つて來てはなりません。もし、その決心がついたなら、やつてあげませう。……」と、お母様は言はれました。

美しい天使は、しばらく考へてゐました。そして、つひに決心をいたしました。

「三年の間、わたしは下界に行つて、辛抱をいたします。そして、いろいろのものを見たり、また、聞いたりして來ます。」と、答へました。

天國から、下界に達する道は、いくつかありました。赤い船に乗つて、雲の間や、波の間を分けてから、恐ろしい旋風に體をまかせて、二日二晩も長い旅をつづけてから、やうやく、下界の河の上に、靜かに降りることも、その一つであれば、また、體を雲と化したり、鳥と化したり、露と化したりして、下界の山の上や、とがつか建物の屋根のいただきや、野原などに降りることもできたのであります。

天使は、人間の力ではできないことも、容易にされたのです。だから、小さなかはいらしい天使が、野蠻な人間の住んでゐる下界へ降りてみたいなどと思つたのも、無理のないことでありました。

小さな天使は、いつしか下界に降りて、美しい少女となつてゐました。

ある秋の寒い日のこと、街はづれの大きな家の門邊かどべに立つて、家の中からもれるピアノの音と、いい歌聲に聞きとれてゐました。あまりに、その音が悲しかつたからです。故郷ふるさとといへば、幾百千里遠いか分らないからです。そして、歸りたいと思つても、今や、そのすべすらなく、まつたく道もなかつたからであります。少女は、どうかして、やさしい人の情によつて救はれたいと思ひました。

10

空は、時雨しぐれの來さうな模様でした。今朝しがたから、街の中をさ迷つてゐたのです。たまたまこの家の前に來て、思はず足を止めて、しばらく聞きとれたのでした。

そのうちに、街には、燈火ともしびがつかしました。家のうちのピアノの音はやんで、

歌の聲もしなくなりました。けれど、あはれな少女は、この家の前を去らうとせず、そこに立つてゐました。

その時、りつばな洋装やうさうをしたお嬢さんが、出て來ました。お嬢さんは、これからどこかへ出かけられる様子でした。

「お姉さん、わたしも一しよにつれていつて下さい。」と、門に立つてゐる少女は、呼びかけました。

11

お嬢さんは、びつくりして振返ると、そこにはかはいらしい、しかし寒さうな、さびしさうな様子をして、少女が自分の顔を見上げてゐましたので、この子供は、どこの子だらうかと、首をかしげたが、思ひ出せませんでした。

「どうして、私が行くところを知つてゐるの？」と、お嬢さんは、言ひました。

「わたしは、お姉さんが、おいでなさるところをよく知つてゐます。お姉さんは、これから舞踏會ぶたかゐにおいでなさるのでせう。わたしは、おじやまをいたしませんから、どうか、つれて行つて下さい。わたしは、みなさんの踊りなさるのが見たいのです。」と、少女は、頼みました。

「ういゝえ、お前さんをつれて行くことなどはできません。早くお歸りなさい。」と、お嬢さんは迷惑さうに言つて、さつさとあちらへ行つてしまひました。

少女は、お嬢さんの行方ゆくへをうらめしさうに見送つてゐますと、お嬢さんの姿は、夕もやのうちにかくれて、消えて行つてしまひました。少女は、仕方なく、さびしい方へと歩いて行きました。

もう日は暮れかかつてゐました。街をはなれると、家の數がだんだん少なくなりました。その時、道の上で、ちやうど自分と同じ年頃の少女が、赤ん坊を

おぶつて、子守唄こもりうたをうたつてゐました。この子守唄を聞くと、歩いて來た少女は、すつかり感心してしまひました。

「なんとといふ情の深い唄だらう。天國でも、これより貴い唄たよとを聞いたことはない。」と、思ひました。そして少女は、近づくつと、赤ん坊をおぶつて、唄をうたつてゐる娘に、やさしく問ひかけたのであります。

もう日が暮れるぢやありませんか。こんなにおそくなるまで、あなたは外に立つて、唄をうたつておいでなさるのですか。」と、少女は言ひました。

赤ん坊をおぶつてゐる娘は、知らない少女ではありましたが、かうやさしく問ひかけられると、眼に涙をためて、

「お母さんが病氣なもんですから、乳をたくさん飲ませることができないのです。なるだけ、赤ちゃんを眠らせるために、かうして、いつまでも外に立つ

て、唄をうたつてゐるのです。」と、言ひました。

少女は、娘の言ふことに、深く同情いたしました。

「そんなら、夜中でも起きて、あなたは唄をうたひなさるのですか？」

「夜中でも起きて、私は、牛乳を飲ませたり、泣く時は守りをしなければなりません。」と、娘は答へました。

美しい、やさしい少女は、感心してしまひました。

「わたしが、今夜、あなたに代つて、赤ちやんの守りをしてあげませうか。」と、少女は言ひました。

「ありがとうございます。母が、かへつて氣をもみますから、どうぞお氣にかけないで下さい。」と、娘は答へました。

少女は、親切が、かへつて迷惑めいわくになつてはいけな**い**と思つて、立去りまし



た。

「はやく、あなたのお母さんのおなほりなさるやうに、祈つてゐます。」と、少女は、立去る時に言ひました。

少女が歩いて來ますと、あとから、赤ん坊をおぶつた娘が追ひかけて來ました。そして、少女を呼びとめました。

「あなたのお家はどこですか……。」

少女は、さびしさうに、娘の顔を見て、ほほえみながら、

「わたしの家は、遠いんですの……。」と、答へました。

娘は、聞いてびつくりしました。

「あなたは、こんなに暗くなつて、どうしてお家へお歸りになることができるとですか……。さたない家ですが、今夜、私の家に泊つて行つて下さい。」

と、娘は、眞心をこめて言ひました。

「わたしのことなら、どうぞおかまひなく……。」と、言つて、少女はとつとつと、あちらへ去つてしまひました。

その晩は、雨になりました。娘は、うす暗い家の中で、赤ん坊の守りをしながら、さつき、前を通つたやさしい少女は、いまごろ、どうしたらうと思つてその身の上を案じてゐたのです。しかし、この夜から、お母さんの病氣は、だんだんよい方に向かひました。

16

いつの間にか、冬が來てしまひました。

木枯の吹く夜のことです。地の上には、二三日前に降つた大雪が、まだ消えずに残つてゐました。空には、きらきらと、星が、すごい雲間に輝いてゐました。

ここに、あはれな年どつた按摩がありました。毎晩のやうに。杖をついて、笛を鳴らしながら、町の中を歩いたのでした。按摩は、坂にかかつて、地がこぼつてゐるものですから、足をすべりました。そのはずみに、懐中の財布を落すと、口があいて、銀貨や、銅貨が、みんなあたりに轉がつてしまつたのでした。

「あ、しまつた！」と、按摩は、あわてて両手で地面を探しはじめました。

17

指のさきは、寒さと冷たさのために痛んで、石ころであるか、土であるか、それとも銅貨であるかさへ、判断がつかなかつたのでした。通る人達は、わき見もせず、みんな寒いので家の方へ急いでゐました。また、通りがかりに、この有様を見た人の中には、拾つてやつて、相手が盲だから、かへつて疑はれるやうなことがあつては、つまらないと思つたり、また、中には、自分で後か

ら来て拾つてやらうと、よくない考へを抱いたやうな者などもありました。
ちやうどこの時、やさしい少女は通りかかつたのです。

「なんといふ、人間は、あさましい心を持つてゐるのでせうか。天國には、
こんな考へを持つてゐるやうなものや、薄情はくじやうのものは一人もないのに！」と、
思ひました。

「お爺さん、わたしが拾つてあげます。」と、少女は言つて、銀貨や、銅貨
を拾つて、按摩の財布の中に入れてやりました。

年とつた按摩は、大へんに喜びました。

「今夜は、道がこほつてすべりますから、出まいかと考へましたのを、出た
ので、こんな目にあひました。まことにありがとうございました。」と言つて、
幾たびとなく禮をのべました。

やさしい少女は、按摩の手をひいて、家へつれて行つてやりました。

家では、お婆さんが、こんなに寒く、道がすべるから、怪我けがでもなければい
いがと、心配してゐました。そこへ、按摩のお爺さんは、少女に手をひかれて
歸つて來ました。

お婆さんは、お爺さんから、今夜少女に助けられた話をきくと、大そう感心
して、厚くお禮を申しました。二人は、少女に、どうか上がつてくれといつて、
家へいれて、火をたいて温あたかにして、少女をいたはりました。

「お嬢さんは、この町の人ではないやうですが、お家はどこでいらつしやい
ますか。」と、お婆さんは、たづねました。

少女は、急に、さびしさうな顔つきをしました。

「この世界には、わたしの家といふものはないのでございます。わたしは、

全くの獨りぼつちで、今日はこの町、明日はあちらの村といふふう歩いてゐます……。」と、少女は答へました。

すると、お婆さんも、お爺さんも、あきれた顔つきをしました。

「まあ、そんなら、お母さんも、お父さんもおありなさるぬのですか？」と、二人はたづねました。

「わたしのお母さんも、お父さんも、ここから遠い、遠い、歩いては行かれないところにいらつしやいます。」と、少女は答へました。

お婆さんは、うなづきました。

「二人とも、おなくなりなされたので……あなたは、みなし子なんですわね。」と、言つて、ひとりですうさめてしまひました。

盲のお爺さんは、お婆さんの袖そでをひきました。

「やさしい子でもあるし、両親がないといふのだから、幸ひ、家の子にしてはどうだな。」と、顔を婆さんの方に向けて、小さな聲で言ひました。

お婆さんは、じろじろと少女の様子を見て、みなし子にしては、あまりきれいで、どことなく上品なので、何等なほか腑ふにおちないやうに、小首を傾かたむけてゐました。

「どうお前さんのやうに、やさやすとさめていいものですか……。」と、怒り聲を出して言ひました。

「お婆さん、よく考へてみるがいい。こんな子供があつたら、どれほど家の役に立つか知れないぜ。」と、按摩は言ひました。

お婆さんは、なるほどとうなづきました。そこで、急に聲をやさしくして、少女に向かつて、

「どこのお嬢さんですか、知りませんが、今のお話のやうな身の上でしたら、私の家の子になつて下さいませんか。實は、私達は、二人ぎりです。さびしくて仕方がないのですから。」と、お婆さんは、頼みました。

少女は、遠い空の彼方のふるさとを思ひ出しました。いつも、ふるさとのことを思ふと悲しくなりました。

「わたしは、この家の子になつてしまふことはできませんけれど、少しの間でよければ、お手傳ひをしてあげます。」と、少女は答へました。

「そんなら、少しの間でもいいから、手傳ひをして下さい。」と、二人は頼みました。

やさしい少女は、この日から、お婆さんや、お爺さんの手傳ひをして、親切に二人のためにつくしたのです。

老人夫婦は、決して心の悪い人ではありませんでしたから、少女は、つらいことがあつても、我慢をいたしました。そして、夜は、按摩のお爺さんの手を引いて町へも行きました。

「お爺さん、寒い晩ですこと。」と、少女は歩きながら、お爺さんに向かつて話しました。

「ああ、早く、春になつて、暖かになつてくれるといい。」と、お爺さんは言ひました。

木枯が、吹いてゐました。そして、星の光が、ぴかぴかと、今にも飛びさうに空に光つてゐました。少女は、じつと、星の光を眺めて、ふるさとを思ひ出してゐたのであります。

春になりました。海の上はおだやかに、山には木々の花が咲いて、野原には

緑色の草が芽ぐみました。ある日のこと、町の人々は、海の上に、不思議な景色が見えるとうわさしました。それは、蜃氣樓しんきろうなのであります。

「お婆さん、海の上に、不思議な景色が見えるといひますから、行つて見ませう……。」と、少女はお婆さんに言ひました。

「ああ、いい天気だから、お前だけ行つて見ておいでなさい。私は年よりだから、歩くのが大そうです。」と、お婆さんは答へました。

少女は、獨りで、海へ行つて見たのであります。限りもなく、海原うなばらは、青々としてかすんでゐました。太陽の光は、うららかに、波の上を照らしてゐました。町の人々は、たくさん海邊へ出て、沖の方を眺めてゐました。そのうちにもうろうとして夢のやうに、影のやうに、どこの景色とも知らない、山や野原や、紫色の屋根などが浮かんで見えたのであります。

「ああ、わたしのふるさとの景色だこと。」と、言つて、少女は飛び上がりました。

天國から下界へ来て、はや三年の月日がたつたのであります。その間には、いろいろの人間の生活に觸れてみました。しかし、今やふるさとに歸る時が来たのであります。

町の人々は、不思議な景色が見えなくなると、家の方に歸りましたが、少女だけは、岩の上に立つて、沖の方を一心に望んでゐました。そのうちに、一艘の赤い船が、こちらをさして漕いで來たのです。少女を迎へに來たのでした。少女は、それに乗ると、二ふたたび天國をさして去りました。このやさしい天使は永久に、この下界に別れを告げたのでした。

天國には、やさしい天使のお母さんが、我が子の歸るのを待つてゐられまし

た。三年間、下界に苦しんで来た子供に、何の變りもなければいいがと心配してゐられました。小さな天使は、無事に、二たびなつかしいお母さんを見る事ができました。お母さんは、やはり、心の美しい、汚れない我が子であると知りなされると、ほんとうにお喜びになりました。

姉の天使も、弟の天使も、みんなが下界の有様を知らうと、このやさしい天使をとりかこんで、お話をうかがひました。小さなやさしい天は、下界で見たことと知つたことを語りました。そして、正直な、あはれな人達に、幸福を興へてやりたいと答へたのであります。

絲のない胡弓

ある時、ある處に、家もなく迷つてゐる、乞食の親達とその子供等がありました。子供は、男の子が二人と、女の子が一人の、都合三人でありまして、いづれも十歳前後の子供でありましたが、そのうちの二人だけは、ほんとうに、その親達の産んだ子供でありましたけれど、一人の痩せた、青い顔色の少年は何處かでもらつたものでありました。

親達は、邪慳にも、自分のほんとうの子供を可愛がりましたが、その一人のもらつた子供を、何かにつけて叱つたのであります。

雨が降つたり、風が吹く日などには、自分の子供等だけは、ある時は小屋の中や、ある時はお宮や、お寺の縁の下に入れておいて、その少年一人だけを、「稼いで来い」と言つて、外に出したのであります。

哀れな少年は、頭から雨に濡れ、短かい破れた着物の裾を風に吹かれて、あ

でもなく、誰か親切な人にお金をもらはうと、悄然と歩いて行くのでした。

もう何處でも、みんな、そんな日には早く戸をしめてしまひます。しかし、根氣よく少年は、あたりを廻つて、眞暗になつてから、遅く歸つて來ました。それで、食物かお錢をもらつて來れば、無事であつたけれど、何もなかつた時は、少年はどんなに酷たらしい目にあつたか知れませんでした。

親達は、それでもなほ、いぢめ足りないと思つたのでせう。そして、どうしたら、少年を思ふ存分、困らしてやることができるだらうと考へた末に、絲の張つてない胡弓を渡して、これを鳴らして、町へ行つて金をもらつて來いと言ひました。

無理を言ふにも、絲のない胡弓がなんで鳴らせませう。少年は、泣く泣く棲家から出て、町の方をさして行きますと、不意に、大きな銀杏の樹の蔭から、

腹ちがひの妹が飛び出して、

「兄さん、ほんとうにあなたは可哀さうです。私の頭髮を絲にして下さい。」と、言つて、妹は自分の頭髮を幾本もぬいて、それを、胡弓に張つてくれたのです。

少年は、妹に心から感謝しました。そして、町の四角に立つて、唄をうたつて、通る人々にお金をもらつて歸りました。

親達は、妹の親切を知ると、大へんに妹を叱りました。何かにつけ、蔭になつて、兄をいたはつた妹の好意も、もはや達することが出來ないやうになりました。

日が暮れると、少年は、絲のない胡弓を持って出かけて行きました。その後で、妹は、どんなに兄さんが困つてゐるだらうと心配しました。

少年は、町の四角に立つて、絲のない胡弓を弾いたのであります。そして、悲しい聲で唄をうたひました。もとより、絲のない胡弓に、音色の出るはずがなかつたけれども、通る人々は、みな足を止めて、その唄に耳を傾けました。そして、やるせない、淋しい音色に涙ぐまされたのであります。不思議にも、みんなの耳には、はつきりと絲の摺れ合ふ音が聞こえたのであります。

その中に、ただ一人、有名な音楽家が立つてゐて、その胡弓に絲のないことを知りました。それにもかかはらず、これほど、人々を感動させるのは、天才だと知つて、その音楽家は、その少年を教育しようと、つひに、少年を我が家に引きとることにになりました。

蝶と三つの右

あるところに、まことにやさしい女がありました。女は年頃になると、水車屋の主人と結婚けっこんをしました。

村はづれの、小川にかかつてゐる水車は、朝から晩まで、唄うたをうたひながら廻まはつてゐました。女も主人も、水車と一しよに働きました。

「なんでも働いて、この村の地主様のやうに金持にならなければだめだ。」と、

主人は頭をふりながら、妻をはげますやうに言ひました。

妻も、さうだと思ひました。そして、それより他ほかのことをば考へませんでしたし

た。春になると、緑色の空はかすんで見えました。木々には、いろいろの花が咲きました。小鳥は、面白さうこずるに梢こずるにとまつて、さへづりました。

夏になると、眞白な雲が屋根の上を流れました。女は、時々それらのうつり變る自然に對して、ぼんやり眺めました。

「ぐづぐづしてゐると、ぢきに日が暮れてしまふ。せつせと働かなけりやならん。」と、傍そばから主人に促うながされると、氣づいたやうに、また、せつせと働きました。

女は、一日、頭から眞白まじろに粉こなを浴びて、働いてゐました。二人は、まだ樂な日を送らないうちに、主人は、病氣にかかりました。そして、その病氣は、日に日に重くなるばかりでした。

醫者は、つひに恢復くわいふくの見込みがないと、見はなしました。その時、主人は、この世を見捨てて行かなければならぬのを、歎なげきましたばかりでなく、女は、夫に別れなければならぬのを、大へんに悲しみました。

「あれは、お前をのこして、獨りあの世へ行くのを悲しく思ふ。けれど、もうかうなつては仕方がない。先にあの世へ行つて、お前の來るのを待つてゐる

から、お前は、この世を幸福に暮らしてからやつて來るがいい。」と、主人は涙ながらに言ひました。

女は、泣いて聞いてゐましたが、

「どうか、私の行くのを待つてゐて下さい。あの世へ行くには、山を上るといひますから、峠たがひのところところで、私の行くのを待つてゐて下さい。」と、女は言ひました。

主人は、安心してうなづきました。そして、つひにこの世から去つてしまつたのであります。

女は、泣き悲しみました。しかし、どうすることも出来ませんでした。その日から、一人となつて働いてゐました。

水車の音は昔のやうに、唄をうたつて廻つてゐましたけれど、女は決して、

昔の日のやうに、幸福でなかつた。女は、一人で生活することは困難でありました。それを知つた村の人は、氣の毒に思ひました。

「お前さんは、まだ若く、美しいのだから、お嫁に行きなされるがいい。ゆくならお世話してあげます。」と、女に向かつて、親切に言つてくれる者もありました。

女は、夫が死ぬ時に、先へ行つて待つてゐるといふ、約束をしたことを思ひ出すと、そんな氣にはなれませんでした。

「死んだ主人に對してすまない。」と、女は答へました。

しかし、村の人は、女の言ふことを却つて笑ひました。

「人間といふものは、死んでしまへば、蠟燭の火の消えたやうなものだ。それよりも、生きてゐるうちが大切なことから。」と、申しました。

女は、さうかと思ひました。急に、心細いやうな感じがして、つひに、お嫁に行く氣になつてしまひました。

女は、機織はたなの家に、二度目に嫁よめいだのであります。そして、今度は、一日中機を織つて、夫の仕事を助けました。夫は、また、妻を可愛がりました。女は前に水車場の男に嫁いだ日のことを忘れて、今の夫を、何よりも大切に思ふやうになりました。

女は、織物の入つた、大風呂敷おほぶろしきの包みを背負つて、街道を歩いて、町へ出ることもありました。頭の上の青空は、いつになつても變りがなかつたけれど、またその空を流れる白い雲にも變りがなかつたけれど、女の様子は變つてゐました。

水車場には、知らぬ人が入つて住まふやうになりました。

「若いうちに、うんと働いて、年をとつてから樂な暮らしをしたいものだ。」
と、二番目の夫は言ひました。

彼女も、また、さう思ひました。

「ほんとうに、さうでございます。」と、女は答へた。

そして夫婦は、一生懸命に、家業に精を出したのであります。四五年たちま
した。

すると、夫が病氣にかかりました。病氣はだんだんと重くなつて、醫者に見
てもらふと、とても助からないといふことであります。

夫は、死んで行く自分の身の上を悲しみました。女は、また、夫に別れなけ
ればならぬのを歎なげきました。

「私が死んでしまつたら、後でどんなにお前は困るだらう。しかし、正直にさ

へ働いてゐれば、この世の中に、さう鬼はない。あまり心配しない方がいい。」
と、夫は、悲しみに沈んでゐる妻をなぐさめて言ひました。

「私は、自分のことを思つて、悲しんでゐるのであります。あなたにお別
れしなければならぬのが悲しいのです。」と、女は答へました。

「何、私は、あの世へ行つて、お前の來るのを待つてゐる。お前は、できる
だけ、この世の中を幸福に送つて來るがいい。」と、夫は言つた。

「あの世へ行く時には、なんでも高い山を上るさうです。どうか、その峠の
ところで待つてゐて下さい。」と、女は言ひました。

夫は、うなづいて、何の心残りもなく、つひに、この世を去つてしまつたの
です。

女は、また一人になりました。そして、たよりない日を送らなければならな

くなりました。村の人は、この不仕合せふしあはせの女に同情をしました。

「まだ若いんだから、いいところがあつたら、お嫁にいつたがいい。お世話をしてあげます。」と、村の人は言つた。

「そんなことをしては、死んだ夫にすみません。」と、女は涙ながらに答へました。

「すむも、すまないもない。死んでしまつた人は、消えたも同じものだ。あの世などといふものは全く無いものです。」と、村の人は言ひました。

女は、ほんとうにさうかと思ひました。そして、人にすすめられるままに、三たびお嫁に行きました。

三度目に行つたのは、鳥屋でありました。そこへ行つても、彼女はよく働きました。鳥に餌をやつたり、いろいろの鳥の世話をしました。月日は早くもた

つて、すでに三たび結婚をしてから、十年あまりにもなりました。すると、夫はある時、病氣にかかりました。彼女は、よく看護をいたしました。けれど、そのかひもなく、夫の病氣は、だんだん重くなるばかりでした。

「お前を後に残して行くのは、この上なく悲しい。けれど、これも運命だから仕方がない。お前は、あの鳥の面倒めんどうを見てやつたら、どうにか暮らして行けないことはない。」と、夫は言ひました。

「ほんとうに悲しいことです。私は、もつと鳥の面倒を見てやります。そして、一日も早くあなたのところへ行かれる日を待つてゐます。」と、女は答へました。

「それで安心をした。どうか達者で、幸福に日を送つてくれ。きつと、私は、待つてゐるから。」と、夫は言ひました。

「あの世へ行くには、高い山を越さなければならぬさうです。どうか、峠で私を待つてゐて下さい。」と、女は言ひました。

男はうなづいて、つひにこの世から去つてしまひました。女は夫の亡くなつてしまつた後、よくその家業を守りました。それから、また長い月日がたちました。女は年をとりました。そして、いつか女自身が、墓に行く日が來たのであります。

女は、佛様に、どうかあの世へ、とどこほりなく行けるやうに、と祈りました。そして、つひに眼を閉ぢる時が來ました。

女は、この世を去つたのです。けれど、靈魂は女の念じたやうに、あの世へ行く旅に上りました。

女は、長い道を歩きました。麗かに日があたつて、野も、山も、かすんで見えました。夢の國の景色を眺めたのであります。女は、やさしい佛様に道案内をされて、廣い野原の中をたどり、いよいよ極樂の世界が、山を一つ越せば見えるといふところまで達しました。

「さあ、もうぢきだ。この山を越すのだ。」と、佛様は言はれました。

女は、青竹の杖をついて、山を上りはじめました。やがて、峠に達しますと、そこに、三人の男が立つて待つてゐました。三人は、自分達の待つてゐる女が、この一人の女であるといふことを知りませんでした。三人は、女を見る

「お前の來るのを待つてゐた。」と、言つて、三方から寄つて來ました。女はびつくりしてしまひました。よく見ると、第一の夫と、第二の夫と、第三の夫であつたのです。

女は、どちらへ行つていいか、全く分らずに途方に暮れてしまつた。

「わしは、長い間、どんなにお前を待つたか知れない。」と、第一の夫が言ひました。

「私は、一番最後にお前と別れたのだ。お前は私と一しよに、あの世へ行くのがほんとうだ。」と、第三の夫が言ひました。

「お前は、私と一しよに、あの世へ行くと言つて、約束をしたぢやないか。」と、第二の夫が言ひました。

女は、全く途方にくれてしまひました。

この様子を、佛様はご覧なされてゐました。

「お前は、悪氣のある女ではないが、さういつて、三人に約束をしたのはほんとうか。」と、佛様は、女にたづねられました。

「私が悪うございます。さういつて三人に約束をしました。けれど、心から嘘をいふ氣で言つたのではございません。一時は、あの世のあることを信じました。一時は、あの世があるかどうかを疑ひました。」と、女は申しました。

佛様は、しばらく黙つて考へてゐられました。

「お前は、三人の中で、一番どの人を愛してゐるか？」と、お聞きになりました。

女は、曾て、一番どの人を愛してゐるかを心に考へたことがないので、返答に困つてゐました。すると、佛様は、

「お前は、どういふやうな氣持で、たびたび結婚をしたのか。」と、あたづねになりました。

女は、自分ひとりで、暮らして行けないから、結婚をしたとも、氣恥かしく

て申されませんでした。

「そんな信仰しんかうのないものは、あの世へ行くことは出来ない。お前は蝶になつて、もう一度下界げかいへ歸つて、よく考へて来るがいい。そして、ほんとうに、惑まどはない悟りさとがつかいたら、その時、あの世へやつてやる。」と、佛様は申されました。

また、佛様は、三人の男に向かつて、

「女がほんとうに悟りさとがついて、永久えいきうに變らない自分の夫を見分けがつくまで、ここに待つてゐるがいい。」と、言はれました。

やがて、女の姿は蝶となりました。そして、夕日の空に向かつて、何處いどこへとなく飛んで行きました。

三人は、峠で、十年、百年、幾百年と待ちました。そのうちに、三人は、三

つの石になつてしまひました。けれど、下界に去つた蝶は、いまだに悟りさとがつかないと見えて、花から花へと、美しい姿をして飛びまはつてゐて、歸つて来ないのであります。

青
い
ラ
ン
プ

不思議なランプがありました。青い笠がかかつてゐました。火をつけると、青い光があたりに流れたのです。

「このランプをつけると、きつと、變つたことがあるよ。」と、いつて、その家では、これをつけることを怖おそしがつてゐました。しかし、前から大事にしてゐるランプなので、どこへもやらずにしまつて置きました。

石油で、火をつける時代はすぎて、いまでは、どんな田舎へ行つても、電燈をつけるやうになりました。が、たまに、不便なところでは、まだランプをともしてゐるところもあります。

この村でも、しばらく前から、電燈をつけるやうになりました。そして、ランプのことなどは、忘れてゐましたので、不思議なランプの話が出ると、みんなは笑ひ出しました。

「そんな馬鹿な話があるものか。この文明の世の中に、化物や悪魔などのぬやうはすがない。昔の人は、いろんなこといつて、閑ひまをつぶしたものだ。それがうそなら、青いランプを出して、つけて見ればいい。」と、たまたま集まつた人達はいひました。

すると、家の人は、

「變つたことがあつても、なくても、さういふいひ傳へだから、めつたなことはするものでない。」と、口をいれたのです。

「いいえ、それは迷信といふものだ。今夜、青いランプをつけて見ようぢやないか？」と、家の人の中でも、來合せた人達と、口をそろへていつた者がありましたので、つい、仕方なく、反對した者も同意することにしました。

みんなは、日の暮れるのを待つてゐました。そして、しまつてあつた、昔の

ランプを出して來ました。

幾十年前からかきれない、石油のしみや、ほこりが、ランプの硝子がらすについてゐました。

「石油が、一たれもはいつてゐない。」

一人は、のぞいて見ながら、

「いつ、つけたか分らないのだから、かわいてしまつたのだ。」と、いひました。

石油を持つてきて、ランプにつきました。そのうちに、日は、暮れてしまひました。窓からは、北の荒い海が見えます。秋から、冬にかけて、雲のかからない日は少なかつたのであります。冷たさうな雲が、沖にただよつて、僅かにうす明りが残つてゐました。

「さあ、ランプをつけるから、電燈を消すのだよ。」と、一人がいひますと、急にみんなは、ぞつとして、だまつてしまひました。室の中は、まつ暗になりました。あたりが静まると、波の音が、ド、ド、ドンと聞こえて來ました。マツチをする音がして、ランプに火がつくと、室の中は、ちやうど春の晩のやうに、ほんのりと青くいろどられて、その光は窓から、遠く海の方へ流れて行きました。

みんなは、しばらくだまつておましたが、

「どうして、このランプは不思議なランプといふのですか？」と、誰かがたづねました。

おそらく、その譯を知つてゐる者は、この家の年とつたお婆さんだけでありませう。が、いままで、お婆さんは、このことをくはしく誰にも話しませんでした。

「このランプは、大事な、不思議なランプだから、しまつて置くのだ。」と、ただ孫達にいつてゐるばかりです。

「お婆さん、どうかそのお話を聞かして下さい。」と、近所の子供達も、大人達も、そこに坐つてをられたお婆さんにたのみました。

「ちや、その話をきかしてあげよう。」と、お婆さんは、青い光にいろどられた室の中で、みんなに向かつて、次のやうな物語をされたのであります。

x x x

お婆さんのお父さんといふ人は、こんなさびしい片田舎に生れた人に似ず、研究心の深い人でありました。

いつも、暗い、もの凄^{すこ}い海の方を見て考へ込んでゐました。「どこか、あちらに、みんなの知らない國があるのにちがひない。まだ發見されないやうな島があるにちがひない。それには、もつといい船を造つて、探^{たん}檢^{けん}に出かけることだ。」などと考へてゐました。

ある日、海の上が、大へんに荒れました。

「こんな日に、沖へ出てゐるやうな船はないだらうな。出てゐたら、助かるまい。」と、お父さんは眉^{まゆ}をひそめて眺めてゐました。58

いつしか、あらしのうちに日が暮れてしまひました。夜になつてから、ますます沖は荒れ狂つて見えました。この時、一つ眞つ暗な海の上に、赤い火が見えたのであります。その火は大きな波にもまれて、をどつてゐました。

「火が、火が、この大あらしに、船がなやんでゐる。どこの船だらう……。」

と、お父さんは、窓に立つて見ながら、氣が氣でありませんでした。しかし、この海岸で、船を出さうといふやうな人を、さがしても、どこにありません。

「あれ、あれ。」と、いふうちに、その赤い火は見えなくなつてしまひました。全く、大きな波に呑み込まれてしまつたものと思はれます。そして、あとは、ただ波の音と、風のさけびと、雨の吹きつける聲がきこえるだけでありました。

59
あくる日、海岸では、大騒ぎでした。一人の勇^{ゆう}敢^{かん}な外國人が、難^{なん}破^ぱ船^{せん}から、こちらの燈^{とも}火^{しび}を目^めあてに、泳いで來て、とうとうたどりつくつと、力がつき、そこに倒れてしまつたのです。これを知つた村の人々は、その外國人をいたはつてやりました。

お婆さんのお父さんも、親切に介^か抱^いしてやつた一人であります。外國人は、

やつと元氣を回復しました。そして、手眞似で、昨夜、船が難破して、乗つてゐたものは、みんな死に、貨物はすつかり、海の底に埋もれてしまつたことを告げました。

「それでも、あなたは勇敢な人だ、よくここまで、泳いで來られたものだ。」と、お父さんはその外國人を尊敬しました。外國人も、またお父さんに親しみました。お婆さんのお父さんは外國人について、外國の言葉をならひました。それから、いろいろあちらの文明の話や、まだ人のたくさん行かないやうな土地で、寶や、珍らしいものが無盡藏にある話などを聞きました。

「ああ、私の思つたことは、空想ではなかつた。ぜひ、行つて大きな仕事をしよう。」と、お父さんは思ひました。

外國人もだんだんこちらの言葉が分り、そしてお父さんと話がいくらか出来るやうになりました。

「もし、人の知らない島を發見したいといふやうなお考へを持たれたら、一度外國へ渡つて、學問をして、それから、遠い、遠い、船出をしなければなりません……。」と、外國人は、さとししました。

お父さんは、成程とうなづきました。外國人は近所に、小さな家を建て、そこに住みました。家のまはりには、いろいろの草花の種子を蒔きました。夏になると、それらが、赤、黄、緑、さまざまの花を咲かせて美しかつたのです。蝶や、蜂は、終日、花の上を飛びまはつてゐました。外國人はそれを見て、自分のふるさとのことを思ひ出してゐました。

どうかして、國へ歸りたいと思ひましたけれど、どうすることも出來なかつたので、自分は、一生をこの村で送るのではないかと考へたこともあります。

お父さんは、よくこの人をたづねて行きました。そして、あちらの話聞いた
り、言葉などをならつたりして、家へ歸ると、窓のところ、青いランプをと
もして、夜おそくまで勉強をしました。ランプの青い光は、海の方からも見え
たのであります。

ある夏の午後、外国人は、遠眼鏡とほめがねで沖の方を見ておりました。すると、あちら
の水平線を大きな黒い船が通るのでした。それは、一目で、この國の船でない
ことが分かりました。だんだんはつきりと見えると、マストの上に、自分の國の
旗がひらひらとひるがへつておりました。

「ああなつかしい、自分の國の船だ！」と、叫ぶと、お父さんのところへ驅
けて來ました。

「いま、あつちを、私の國の船が通ります。これは、神様のお助けです。ど



うかして、あの船に合圖あひづをして、乗り込むことはできないものでせうか。」と、訴うたへました。

親切な、正直なお父さんは、これを他人のこととは思ひませんでした。

「どれ、私に、その眼鏡をおかし下さい。」と、いつて、自分の眼にあてて沖を見ながら、

「成程、りつばな大きな船だ。この船を逃がしたら、いつまた乗れるといふ當あてはありますまい。すぐに、合圖をしませう。」と、いつて、近所の人々を呼び集めて、海岸の小高いところで、火をどんどん焚きました。

人々が、外國人を助けたいといふまごころが、あちらの船に通じたと見えて、船から、汽笛の音が、三たび聞こえました。

「あれは、分つたといふしらせにちがひない。」

みんなは首をのばして、沖の方を見つめてゐますと、だんだん、黒い船の姿が、大きくはつきりとして來ました。

これを見た外國人は、聲をかぎりに叫んで、狂はんばかりに喜びました。

「さあ、あなたも私といつしよにいらつしやい。」と、いつて、傍に立つてゐるお父さんの頸くびに抱きつきました。

お父さんは、日ごろから、外國へ行つて見たいと思つてゐました。しかし、そのころ、そんなことがどうして容易にできませう。まことに、これこそいい都合でありました。

「どうか、それなら、私をつれていつて下さう。」と、お父さんも、熱心に頼みました。

お婆さんは、まだ小さな娘でありました。お父さんが、荒海を越えて、あち

らの外國へ行かれると聞いたので、どんなに、それを悲しみましたでせう。もう、行けば、二度と歸つて來られないもののやうに思はれたからです。そしてお婆さんのお母さんといつしよに、

「お父さん、外國へなど、行かないで下さい。」と、願ひました。

「なに、心配することはない。きつと、無事に歸つて來るから。」と、お父さんは答へて、いくら止めさせようとしてもだめでした。

母と娘は、お父さんの決心の固いのを知ると、せめて、そのお歸りを待つより仕方のないのを悟りました。

「そんなら、いつお歸りなさいますか、教へて下さい。」と、二人はいひました。

「ぢや、約束をしよう。いまから五年目に、きつと歸つて來るから。」と、お

父さんは答へました。

汽船からは引下ろされた小舟が、陸をさして來ました。それから、しばらくして、外國人とお父さんはその小舟に乗りました。小舟は、晩方の金色に輝く波を切つて、ふたたび陸をはなれて、あちらに泊つてゐる汽船をさして漕ぎました。海鳥は、美しい夕空に面白さうに飛んでゐました。

母と娘と近所の人達は、名残惜しさうに、眼に涙を浮かべて、沖の方を眺めてゐました。小舟は小さく、小さくなつて、いつしか船に漕ぎつくつと、人も舟も、同時に、引きあげられて、船は、暮れて行く空に汽笛を鳴らして、いづこへと、なく去つてしまひました。

繪で見ると、お父さんの行かれた外國には、りつばな町があつて、馬車が通つてゐます。また、男も、女も、思ひ思ひに、綺麗な風をして歩いてゐます。

お父さんからは、行つたきり、たよりがありませんでした。留守をしてゐる、家の人々は、ただ五年のあひだの早くたつのを待つてゐました。

外國人の住んでゐた家は、空屋になつて、誰も住んでゐませんでした。ただ夏が來ると、家のまはりには、いろいろの草が自然に芽を出して、赤、白、紫、黄の花が美しく咲きました。そして、沖から吹いてくる風は、それらの花を動かしました。蝶や、蜂は、朝から集まつて來て、日の暮れるころまで、楽しく遊んでゐました。

「お父さんは、無事にお歸りになれるだらうか？」

「あの外國人でさへ、ああして、歸つて行つたのだもの、人の思ひの通らないことはない。きつと五年たつたら、お父さんは、歸つておいでなさる……。」
一年は、また一年と經つて行きました。年々種子が残つて咲いた草花も、そ

の後、誰も手をいれるものがなかつたので、外国人の住んでゐた家の荒れるとともに、花の数は少なくなつてしまひました。かうして、つひにお父さんの歸るといはれた五年目となつたのであります。

お母さんは、お父さんの留守の間に、ランプの下で、さびしく仕事をしてゐました。このあたりの海は、十月の末になれば、波が高く、どんな船も、あまり通ることはしなかつたのでした。

「もう、お父さんは、お歸りになりさうなものだ。」

かういつて、娘と母は、毎日のやうに、海岸に立つては、船のはいつて来る影を待つてゐました。しかし、夕焼の美しかつた夏には、とうとうお父さんは歸つて來られませんでした。

「今年は、お父さんは、お歸りにならないのだらうか？」と、娘がいふと、

「うゝえ、お父さんは、約束なされたことは、決してお違ひなされはしない。きつと、今夜あたり、歸つておいでなさるだらう。」と、いつて、お母さんは何か蟲が知らせるのか、かたく信じて、いつものごとく、青いランプに火をつけて、窓際に坐つて待つてゐられました。

その日は、何となく、家の人々の胸さわぎのする晩でした。

「今夜は、歸つておいでなさる。」と、お母さんは信じて、暗い海の方を見てゐられると、不意に、夜嵐よあらしの窓に吹きつけるやうに、幾羽ともなく、黒い海鳥が、青いランプの火を目がけて、どこからともなく、飛んできて、窓につきあたつたのであります。

お母さんは、神様や、佛様に、口のうちでもお祈りをして、どうか、お父さんの身の上に變りのないやうにと願ひました。そして、一夜まんぢゅとも眠り

ませんでした。

その翌晩も、どこからともなく、黒い鳥が、青いランプの火を目がけて飛んで来ました。毎晩、青いランプに火をつけると、どこからともなく、この黒い鳥の群が、押し寄せて来たのであります。みんなは、このランプを氣味悪がりしました。そして、不思議なランプとして、もうそれをつけないことにして、しまつたのであります。

そしてお父さんは、とうとう歸つて来られませんでした。

× × ×

これが、お婆さんのお話であります。その時のお母さんは、もうとつづくに死んでしまひ、その時の娘さんは、この物語をしたお婆さんなのでした。

「そのお父さんは、どうなされたのでせうね。」と、この室に集まつた人達は、お婆さんにたづねました。

「外國から、こちらへ来る船がなかつたものか、それとも、どこかの島へ渡つて、自分の思つたやうな仕事をなされたものか、分らないのだよ。」と、お婆さんは、答へました。

「いまでも分りませんか？」

「私が、こんなにお婆さんになつたのだから、もう、お父さんは、この世にあつてなされるはずはないでせう。」

みんなは、これを聞いて、さびしい氣持がしました。青いランプの火は、その昔のやうに、青い光を今も室の中にあだよはせてゐます。

「黒い鳥が、今夜も飛んでくるかしら。」と、子供達は、言ひました。

誰も、これについて、はつきり答へるものはありませんでした。そして、皆は、お婆さんの顔を見ました。お婆さんは、うつむいて、遠い昔のことを思ひ出すやうに、また、岸に打つ波の音に聞きいつてゐるやうに、じつとしてゐられました。

「お婆さん、黒い鳥が、今夜も飛んで来るでせうか？」

「もう、そんなこともあるまい。あの時分、國へ歸りたい、歸りたいと、お父さんが、毎夜思つてゐなされたから、鳥になつて來なされたのかも知れないが、もう、そんなことはないだらう。」と、お婆さんはいはれました。

はたして、その夜は、何の變つたこともなく、秋の海は、すすり泣くやうに静かにふけて行つたのであります。

二度と通らない旅人

さびしい處に、一軒の家がありました。

そこは、荒海に近い、山の中であつて、麓ふもとの村から、海邊うみべへぬける、間道かんどうになつてゐたから、夏の時分には、家の前を通る人がありましたけれど、やうやく秋も末になつて、日が短かくなり、嶺みねや、谷間の木の葉が、風に吹かれて散るところになると、次第に人足も絶えてしまつたのであります。

ある日の暮方、西の空が、氣味の悪いほど、黄色かつた。いつも、あらしの來る前には、かうした空模様そらもようが見られたのです。果して、夜になると、ひどい風雨になりました。

家の人々は、戸を閉めて、外のすさまじい風雨の音に、耳をすましてゐました。

「この後は、雪になるだらう……。」と、ささやき合ひながら、火を焚いて、

あたつてゐました。

をりをり、大きな風が吹くと、家をこのまま持つて行つて、深い谷底へ投げこみはしないかとさへ思はれたのです。

「ああ苦しい。咽喉が渴いたから、水をおくれ。」と、そちらの室で臥てゐる娘が言ひました。

母親は、その方を向いて、心配さうな顔つきをしてゐました。

父親と、兄は、それを聞いても、聞かぬふりをして、火の前に坐つて、話をしてゐました。

「お母さん……水をおくれよ。」と、また臥てゐる娘が言ひました。

「さう水ばかり飲んで、よくないから、すこし我慢をしろよ。」と、母親が、答へたのです。

父親も兄も、困つたものだ、といふやうな顔つきをしてゐました。

「ああ苦しい。兄さん、水を持つて来ておくれよ。」と、病氣の娘は、こんどは兄に向かつて、頼んでゐたのです。

「水ばかり、飲んで、だんだん病氣が悪くなるばかりだ。いけない、いけない。」と、兄は、大きな聲で言ひました。

娘は、あきらめたものか、しばらく、黙つてしまひました。外のあらしの音は、ますます募つて來ました。そして横さまに、吹きつける雨風が戸にぶつかる音は、いまにも、この一軒家を叩き壊しはしないかと思はれたのでした。ちやうど、この時であります。

「今晚は、今晚は……。」と、言つて、誰か、戸をたたいた者がありました。

「いま時分、誰だらう……？」と、家の内では顔を見合はせました。

なぜなら、こんな山の中へ、いま頃になつて訪ねて来るやうな者は、めつたになかつたからです。そればかりでなく、その聲は、全く聞き覚えがなかつたからでした。

「今晚は、今晚は……。」と、言つて、誰か、戸をたたきました。

「黙つてゐた方がいい。知らぬ振りをしてゐたら、もう寝たのだと思つて、歸つて行くかも知れない。」と、父親が、低い聲で言ひました。

「さうです。黙つてゐた方がいい。」と、息子も言ひました。

あらしの音は、ますます募るばかりで、少しも止みませんでした。その合間に、

「トン、トン、トン……今晚は、今晚は……。」と、言ふ聲が聞こえました。

やはり、家の内では、みんなが黙つて、寝たふりをしてゐました。

「誰か来たやうだよ。あんなに、戸を叩いてゐるぢやないの……。」と、病氣で臥てゐる娘が言つたのです。

「お前は、だまつてゐるのだよ。」と、母親は、枕許へ行つて叱りました。

この時、戸の外に立つてゐる男は、心から訴へるやうに、

「おねがひです……どうか、戸を開けて下さい。火を焚いてゐられますのなら、まだ起きてゐるであります……どうか少し戸を開けて下さい。」と、頼みました。

父親と息子とは、顔を見合はせました。

「誰か知らないが、戸口まで行つて見たがいい。」と、父親は、言つて、息子は、手に太い棒を持つて、二人は、十分用心をしながら、戸口まで行きました。

「誰だか知らないが、今時分、何用があつて戸を叩くんだね。」と、怒つたやうな調子で、父親は言ひました。

「まことに、すみません。どうぞ、少し戸をお開け下さい。」と、戸の外に立つてゐる男は、哀れげな聲を出して訴へました。

「馬鹿を言つてゐる。このあらしに、戸が開けられるものか。用があつたら、さつさとそこで言つたがいい。」と、父親は、言ひました。

息子は、太い棒をしつかりと握つて、腕節に力をいれてゐました。

「私は、旅の者です。海岸から山道を來て、このあらしの中で、道を迷つてしまひました。それに暗くて、この雨風では、一足も歩むことが出来ません。どうか、その土間の隅でよろしうございますから、一晚泊めていただくことはできませんか……。」

「だめだ、だめだ。どこの者か、知らない者を、家の内へ入れて泊めることはできない。もう少し行けば、村へ降る道がある。村へ出て、どこへなりと頼んだがいい。」と、父親は、頭から、男の願ひをはねつけてしまひました。

男は、戸の外で、深い溜息をついてゐました。しばらくしてから、男は、二たび、哀しげな聲を出して、

「はじめての道で、少しも見當がつかえません。土間で、よろしいのですが、雨風の當らぬところへ入れて下さいませんか……。」と、頼みました。

「くどい！ さつさと行つてくれ。」と、息子が、腕をぶるぶる振はして言ひました。

すると、戸の外に立つてゐる、知らぬ男は、

「しかたがありません。行きます。私は、咽喉が非常に渴いてゐるのですが、

一杯、水をただかして下さい。それで、元氣をつけてまゐりますから……。」と、言ひました。

父親と息子は、顔を見合はしましたが、父親は、頭を振りました。そして、大きな聲を出して、

「その水をあげることができんだ。娘が、病氣で、水をほしがつてゐる。

飲ませば死んでしまふので、水音をさせまいと思つて、柄杓ひしゃくに手を付けることもできんから、せつかくだが、村へ行つて、飲んでもらひたい。」と、言ひました。

その聲が、娘の耳にも、はいつたと見えて、

「お父さん、咽喉が渴いた、水をおくれよ。ああ、苦しい。水をおくれよ——」

水は、いくらもあるでせう。水を、きれいといふ人におあげよ——」と、言つ

たのであります。

戸の外に立つてゐる人は、娘のうめいた聲を聞いたのであります。

「どんな、病氣が知りませんが、ここに、いい薬があります。私はかうして旅をしますので、行く先で、名薬を手に入れることができます。この薬を分けてあげますから、戸を少し、開けて下さい。」と、旅の人は、言つたのでした。

父親と息子は、また顔を見合せました。

「どうしたら、いいものだらうか……。」と、眼と眼で、相談したのです。

この時、戸の外から、

「決して、御迷惑ごめいわくをかけません。この薬をあげたいばかりに、戸を少し開けて下さい。」と、旅人は、言ひました。

村の醫者も見放した娘を、さすがに親の情で、どうかして、助けられたので、父親は、用心をしながら、戸を少しばかり開けました。旅人は、僅かに、手を出して、丸薬を五六粒ばかり、戸の内側に立つてゐる、父親の掌に渡したのでした。

この時、父親は、自分の旅人に對する仕打を省みて、何となく恥かしく思つた。それで、この旅人を家の内へ入れようかと、心で躊躇しました。けれど、そのまま旅人の姿は、闇の裡に消えてしまつたのです。

「お父さん、水だけ、飲ましてやりませう。」と、息子が、言ふと、父親は、すぐに、家の外へ出て見ました。何といつても、ひどいあらしであつて、後を追ふことができませんでした。

二人は、火の傍へもどつて來ました。

「まあ、親切な人があつたもんだ。泊めてもやらす、水を飲ましてやらないのに、薬をくれて行くとは、何といふ親切な人だらう……。」と、母親が言ひました。

「どんな薬か分つたものでない。」と、父親は、旅人のくれた薬を信ずることができなかつた。

戸をたたく、風の音と雨の音とは、いつまでも衰へませんでした。

「あの男は、どうしたでせう。村へ、いま頃は着いたでせうか？」と、息子は、しばらくしてから思ひ出したやうに言ひました。父親も、自分達が情なくした人のことを考へると、良心に責められるものか、不快な氣がして、だまりこんで、火を見つめてゐました。

その夜、娘は、苦しみぬいて、水を欲しがつてゐました。明くる日は、もは

や、娘は、それを、訴へるだけの氣力もありませんでした。

暴風雨の後はからりと晴れて、いよいよ雪の降りさうな寒さとなりました。谷間の木の葉はすっかり落ちて、嶺のいただきの空は、青硝子のやうに冴えてゐたのです。

息子は、両親の言ひつけで、村へ、醫者を迎へに行きました。みんなは、病人が急に悪くなつたので、昨夜の男のことなどを忘れてゐました。醫者は、早速来て病人を見ましたが、もはや、この分では、今日にも、むづかしからうと言ひました。そして、醫者は、しばらくして歸つて行きました。

この時、母親は、昨夜、旅人のくれた、丸薬をやつて見たら、どうかと言ひました。

「もう、かうなれば、何を飲ましたつて、飲まさなくたつて、同じことだら

う。」と、父親は、言つて、盆にのせて置いた、丸薬を持つて来て、娘に飲ましたのであります。

旅人の言つたことに、偽りは、ありませんでした。その薬は、不思議によくきいたのであります。もう、むづかしいと、醫者の見放した娘は、夕暮方に、あたりを見まはしたり、母親の顔を見て、笑ふやうになりました。

その翌日は、一層よくなりました。そして、日を追ふに従つて、だんだんとよくなつて行つたのであります。

いつしか、娘は、全快して、もとの體になつてしまひました。この話が、村に傳はると、村人は、あらしの夜のことを、思ひ出しました。そして、その夜は、村の誰の家へも、その旅人は、やつて來なかつたことなどを語り合つたのです。

「きつと、その人は、神様だ。この頃、みんなが薄情はくじやうになつて、神といふものを信じないから、神の力をあしなされたのだ。それだから、いつ何時、あの娘をつれて行かれるか知れない。」と、言つた者もありました。

この不思議なことがあつてから、父親は、自分達の薄情であつたことを後悔こうかいしたので。そして、どうか、もう一度、いつかの旅人が、ここへ訪ねて来てくれるやうに、さうしたら、自分達は、できるだけの親切をしようものと思ひました。

娘は、いつしか、美しい、一人前の女になりました。村から、お嫁よめにもらひ手がたくさんありました。どれにしようかと惑まどつたほどです。彼女は、その中の、一番いいところを選んで行きました。そして、幸福に送ることができたのです。

娘が、幸福に暮らすのを見るにつけて、すべてが、あの旅人のお蔭だと、父親は、思ひました。娘に生れた、可愛らしい孫達が、

「お爺さん、お爺さん。」と、言つて、慕つて來ます。さうした仕合せしあはせな境遇きやうぐいになるにつけて、父親は、あらしの晩のことを思ひ出さずにはゐられませんでした。

獨ひとり、後悔したのは、父親ばかりでなかつた。息子も、母親も、あの夜の旅の人に對して冷酷れいこくであつた自分達のことを思ひ出すと、たまらなく恥づかしくなりました。そして、その顔さへ見ておかなかつたことを、いまさら残念に思つたのであります。

「この後もあることだが、ああした夜、泊めてくれと頼んだ人があつたら、快く泊めてやらなければならぬ。」と、一家の人達は、語り合つたのでした。

それから、いくら年月が経つたでありませう。その間には、風の日もあり、雨の日もあり、雪の日もありました。けれど、二たび、このさびしい家へ、泊めてくれと言つて、来た人はなかつたのです。

時計のない村

町から、遠く離れた田舎のことです。その村には、あまり富んだもの
がありませんでした。村中で、時計が、たつた二つきりしかなかつたのです。

長い間、この村の人々は、時計がなくて済んで来ました。太陽の上がり具合
を見て、およその時刻をはかりました。けれど、この文明の世の中に、時計を用
ひなくては話にならぬといふので、村の中での金持の一人が、町に出た時に、
その町の時計屋から、一つの時計を求めたのであります。

その金持は、今、自分はたくさんの金を拂つて、時計を求めることを心の中
で誇りとしました。今日から村の者たちは、萬事の集まりや、約束の時間を、
この時計によつてしなければならぬと思つたからであります。

「この時計は、狂ふやうなことはないだらうな。」と、金持は、時計屋の番頭
にたづねました。

「決して、狂ふやうなことはありません。そんなお品ではございません。」と、番頭は答へました。

「それなら、安心だが。」と、金持は、ほほえみました。

「この店の時間は、間違ひないだらうな。」と、金持は、またさきました。

「決して間違つてはゐません。標準時に合はせてございます。」と、番頭は答へました。

「それなら、安心だ。」と、金持は、思つたのであります。

金持は、買った時計を大事にして、自分の村へ持つて歸りました。

これまで、時計といふものを見なれなかつた村の人々は、毎日のやうに、その金持の家へおしかけて來ました。そして、ひとりで動く針を見て、不思議に思ひました。また、金持から、時間の見方を教はつて、彼等は、畑に行つて

も、山に行つても、寄ると時計の話をしたのであります。

この村に、もう一人金持がありました。その男は、村の者が、一方の金持の家ばかり出入するのを、嫉ましく思ひました。時計があるばかりに、みんなが、その家へ行くのが癪にさはつたのであります。

「どれ、あれも、一つ時計を買つて來よう。さうすれば、きつとおれの所へも皆がやつて來るにちがひない。」と、その男は思つたのです。

男は、町へ出ました。そして、もう一人の金持が時計を買つた店と、ちがつた店へ行きました。その店も、町での大きな時計屋であつたのです。男は、いろいろな形の時計を、この店で見ました。なるだけ、珍らしいと思つたのを、男は選びました。

「この時計は、狂はないだらうか。」と、男は、店の番頭に問ひました。

「そんなことは、決してございません。保険附ほけんつきでございます。」と、番頭は答へました。

「その時計の時間は、合つてゐるだらうか。」と、男は、たづねました。

「標準時に合つてゐます。」と、番頭は答へました。

「ねぢさへかけておけば、いつまでたつても間違ひはないだらうか。」と、男は、念ねんのために問ひました。

「この時計は、幾年たつても、狂ふやうなことはございません。」と、番頭は答へました。

男は、これを持つて歸れば、村の者たちが、みんな、見にやつて來ると思つて、その時計を買つて大事にして村へ歸りました。

もう一人の金持が、別の時計を町から買つて來たといふ噂うわさが村にたつと、果はた

して、みんながやつて來ました。

「時計をどうを見せて下さい。」と、村の者たちが、口々に言ひました。

男は、さう言つて來るだらうと思つてゐたところへ、みんながやつて來ましたから、得意とくいになつて、

「さあ、上がつて見なさい。なかなか機械のいい時計なんだから、この時間ばかりは安心していいのだ。」と、男は言ひました。

村の者たちは、時計の形が變つてゐましたので、

「やあ、これは珍めづらしい。」と、言つて、その時計の前に、頭を集めてほめそやしました。

しかるに、不思議なことには、村に二つ時計がありました。が、どうしたことか、二つの時計は、約三十分ばかり時間が違つてゐました。どちらが違つてゐ

るのか、誰もそれを知ることができないのであります。

「この時計は狂つてゐない。標準時に合つてゐるのだ。」と、一人の金持が言ひますと、

「この時計こそ合つてゐるのだ。上等の機械で、町の時計にちゃんと合はして来たのだ。」と、他の金持が言ひました。

二人の金持は、互に自分の時計を正しいといつて譲りませんでした。二つの時計は、厳かな掟のやうに、村の者は、二つに分かれて、一方は、甲の金持の時計を正しいと言ひました。一方は、乙の金持の時計を正しいと言ひました。

今まで平和であつた村が、時計のために、二つに分かれてしまひました。時計は、神様のやうになつてしまつたのです。

「今夜六時から集まる。」と、言ひ合はしても、一方の者は、乙の金持の時計

が六時になると會場に集まりましたが、一方の者は、甲の金持の時計が六時にならないので集まりませんでした。それで、三十分あまりも、二つの時計の時間がちがつてゐましたから、前に集まつたものは、後から来た者に對して、待たされて、小言をいひました。

「おれたちは、ちゃんと六時に来たのだ。こちらの時計に狂ひはない筈だ。

それは、お前さんたちの時計がまちがつてゐるからだ。」と、後から来た者は言ひました。

「いや、私たちの方の時計は、まちがつてゐない。お前さんたちの方の時計こそまちがつてゐるのだ。」と、前に集まつた者が言ひました。

かうして、時計によつて雙方が争つたのです。

「待つてやつて、理窟をいはれるやうぢやつまらない。さつさと時間が来た

ら、仕事を始めてしまふがいい。」と、早い時間を信ずる組は、遅れた時間を信ずる者にかまはずに、相談を進めるやうになりました。

こんなやうなことで、常に時間から、雙方の争ひが絶えませんでした。そのうちに、ふとしたことから、乙の方の時計が壊れてしまひました。今まで、毎日まはつてゐた針が、全く動かなくなつてしまつたのです。

神様のやうに、その時計の時間を信じてゐた乙の方の組は、その日から眞暗になつたやうに、全く時間といふものが分らなくなりました。

さうかといつて、今まで争つてゐた甲の方へ行つて、時間をさくのも恥と感じましたから、

「あれたちは、もう時間がないのだ。」と、言つて、村の相談があつても、時刻が常にまともりませんでした。

甲の組は、さすがに、自分たちの方の時計は狂はない正しい時計だと、いよいよその時計のありがたみを感じたわけです。かうなれば、乙の組の者も、こちらに従はなければならぬと思つてゐました。それで相談のある時は、

「午後六時より。」と、いふやうに、時間を定めて、乙の方へ通知をいたしました。けれど、時計を持たなくなつた乙の方は、六時がいつであるか分りません。こんなことで、いつも相談が、はかどりませんでした。

時計が二つあつた時よりも、一つになつた時の方が、村のまともりがつかなくなつたのです。甲の方も、案外、乙の方が自分たちに従つて來ないのを知ると、困つてしまつたのです。

「町へ行つて、時計を直して來なければならぬ。」と、乙の方の一人が言ひました。

「直したつて仕方がない。壊れるやうな時計は、もう信用することができな
い。」と、他の一人が言ひました。

「さうすれば、どうしたらいいのか。」

「壊れない、いい時計をさがして来るより仕方がない。」

「そんないい時計は、何處へ行つたら見つかるだらうか。」と、乙の方は、寄
ると集まると、口々にその話をしたのであります。

乙の金持は、

「今年、酒がよく造れたら、遠い町へ行つて、いい時計を買つて来よう。」と、
言ひました。

さうしてゐるうちに、ふと、ある日のこと、甲の方の時計も壊れてしまつた
のです。自分たちの方の時計は、決して狂ふことはないといつて、威張つてゐ

ましたが、つひに、その甲の方の時計も壊れてしまつたのです。

「やはり、時計なんかといふものはだめだ。直ぐに壊れてしまふ。信用ので
きるものでない。」と、一人が言ひますと、

「時計があつたつて、なくなつて、この一日には變りがないぢやないか。」と、
他の一人が言ひました。

甲の方では、乙の方の時計も壊れてしまつたのだから、今さら急いで新しい
時計を、町へ行つて求める氣にもなりませんでした。

乙の方でも、甲の方の時計が壊れたと聞いて、今さら、町へ行つて、新しい
時計を求めるといふ氣持が起りませんでした。

村は、いつしか、時計のなかつた昔の状態にかへつたのです。そして、たよ
るべき時計がないと思ふと、皆は、また昔のやうに、大空を仰いで 陽の上

り具合で、時間をはかりました。そして、それは少しの不自由をも彼等に感じさせなかつたのです。時計が壊れても、太陽は、決して壊れたり、狂つたりすることはありませんでした。

「時計なんか、いらぬ。お天道様てんとうさまさへあればたぐさんだ。」と、言つて、皆は、始めて太陽をありがたがりました。そして、集合の時刻も、太陽のまはり具合できめました。ために皆は、また昔のやうに一致いっせいして、いつとなく、村は平和に治まつたといふことであります。

平原の木と鳥

春の先驅者である雲雀が、大空に高く舞ひ上がつて、しきりに、さへづる時に、謙遜な頬白は、田圃の畦道に立つてゐる榛の木や、平原の高いのいただきに止まつて、村や、野原を眺めながら、さへづりました。

「もつと高く上がつて、鳴いたらいいぢやないか？ 春のさきがけとなるくらゐなら、おれみたいに敵を怖しがらぬ勇氣がなければならぬ。おれは、高く、高く、できるだけ高く上がつて、聲をかぎりに鳴くのだ。野原や、村にばかり呼びかけるのぢやない。遠くの町にも、海にも呼びかけるのだ。どこからでも、おれの姿は見えるだらう。敵は、いつでもおれを狙ふことができる。おれは春の先驅者なんだ。君たちも、もつと勇氣がなければいけない。」

雲雀は、かう、頬白に向かつて言ひました。おとなしい頬白だつたけれど、卑怯者と見られたことが残念だつたのです。

「雲雀君、それはちがふでせう？ なるほど、君は海に、野原に、町に、村に、呼びかけてゐる。そして、雲の上まで高く昇つて呼びかけてゐる。みんなは、君の姿を見ようとするけれど、あまりに地上から距離がはなれてゐます。君を捕へようと思ふものまで、あきらめてしまふものが多い。だから、君の評判は高いけれど、かへつて安全なのです。これに反して、私たちは高く上がらないでせう。或は、性質上できないのかも知れません。いつも、梢のいただきから、いただきへと飛びまはつて、叫んでゐます。そして、君の言はれるやうに、私の聲は、あちらの町や、海の上にまで達しないかも知れない。けれど、野原に生活する一切のものに、村で働くすべての者に、春の魂をふきこんでゐます。君の叫びと私の叫びと、叫びがちがふとは決して思つてゐない。敵に狙はれるといふことからいへば、地上にゐるだけ、どれほど私たちの方が危険で

あるか知れないでせう。」

頬白は、かう、傲慢な雲雀に向かつて、答へました。雲雀は、この言葉を聞かぬふりして、あざけりながら、空に吸ひこまれるやうに舞ひ上がつて、姿を消してしまつたのです。しかし、その朗らかにうたふ聲だけは、きこえて來ました。

頬白は、さつきから、同じ田の畦道に立つてゐる榛の木にとまつて、あたりを見まはしながら、鍬をとる百姓に、鋤を引く牛に、馬に、勇氣と自由の精神をふるひ立たせようと、さへづつてゐたのです。

それは、白い雲の、あわただしく流れる日でした。この雄の頬白は、この間からつけ狙つてゐた町の鳥刺のために、少しの油断を見すかされて、つひに捕へられてしまいました。

もう翌日から、ふたたび彼のさへづる聲をさくことができなかつた。

「けふは、あの頬白が鳴かないが どうしたらうか？」

百姓たちは、なんとなく、もの足りなく思ひました。そして、腰を伸ばして、あちらの榛の木の方をながめたのです。

どこからともなく、雲雀の聲がきこえてきました。ちやうど、この時、雄の頬白を失つた雌の頬白は、ひとり、藪の繁みで悲しんでゐました。

彼女は、やがて産れる子供たちのために、自ら巢を造らなければならなかつた。

「どこがいいだらう……。私は、子供を大切に育てなければならぬ。子供たちが大きくなるまでは、いくら悲しくても、また、氣があせつても、どこへも行くことはできない。」

雌の頬白は、うつぎの木の花が咲く、藪の中に巢をつくりました。そして、その中へ、かはいらしい卵を三つ産み落したのです。彼女の仕事は、これらの卵を、りつばな頬白にかへすよりほかには、なかつたのであります。

その長い間には、いい月夜の晩もあれば、風の日もあり、また、雨の日もありました。何かにつけて、昔の目が思ひ出されたのでした。

「夫は、どこへつれられて行つたらう？ もう歸つて來ることもあるまい。」

梢の先が、風にゆるるのを見ては、小さな胸がさわぎました。いつも、あんなやうにして、不意に飛んできて、夫は近くの枝にとまつたからです。

春の終りの頃に、三つの卵は、かはいらしい三羽の雛にかへりました。

「なんと見事を俵たちだらう！」

母鳥は、三羽の子供を見るたびに、父鳥にひと目でも見せてやりたく思ひま

した。それは、空しい願ひであるを知りながら……。
子供たちは大きくなりました。夏の頃には、もう、ひとりで附近を飛び歩けるやうになりました。

「もう少し大きくならなければ、そして、羽が強くならなければ、お前の敵に襲はれた時に、どうすることもできない。それまで、この藪の中から、あまり遠くへ行つてはいけません。」と、母鳥はさとししました。

あちらを見ると、こんもりとした、高い樫の木が、野原のまん中に立つてゐました。彼等の父鳥は、その木のいただきにとまつて、さへづつたのです。また、それから離れて、田の畦のたくさんの並木の間にまじつて、榛の木立が、かすんで見えませんでした。そこで、彼等の父鳥は、狡猾な人間のために捕へられたのでした。

「お父さんは、どうなされたでせう？」

母鳥から、父鳥の話をきかされてゐたので、子供たちは、父鳥を思つてたづねました。

「どうなされたか？ お父さんがわるいのでない。お父さんは、正直だつた。お父さんは正しかったのだよ。」

「僕たちも、時節が来たら、お父さんのやうに、誰に氣がねすることもなく、朗らかに歌ふつもりです。すべてのものが勇氣をもつやうに、また、正しく働くやうに……。」

子供たちは、思ひ思ひのことを、母鳥に訴へるごとく語りました。そして、正しい父鳥が、罪もなく殺されるとは、どうしても考へられなかつたのです。

「お母さん、どうして、罪もないのに、お父さんは捕へられたのですか。」

「お父さんが、みんなのために、いい唄をうたつたのを、その人間は、自分だけで、その唄をさかうとしたのだよ。」

「ぢや、お父さん捕へて、殺しはしないんですね。」

「人間が、生かしておかうとしても、自由がなければ、なんでお父さんが生きてゐられるものか。ああ、あちらの町がうらめしい！」

母鳥は、うつぎの木の枝から、枝を飛んで、小さな胸のうらみにこらへかねてゐました。

「なぜ、お母さん、私たちも、人間の手のとどかない、大空高く舞ひ上がつて鳴かないのですか？」

と、子供たちが、たづねると、

「それは、勇氣のある鳥のすることですか。」

ど、母鳥は、叱るごとく言つたので、子供たちは頸をすくめて、だまつてしまひました。

子供たちは、毎日、あちらの高い櫛の木の方を眺めてゐました。

「あすこまで、どれほどあるだらう？」

それは、大へんに遠いやうにも思はれました。ある時は、その木のいただきの空に、星がびかびかと輝いて見えました。また、ある時は、あちらの空に雷いな光ひかりがして、雷かみなりが鳴り、しばらくすると、黒い雲が野原の上にたれ下がつて、雨が襲ひ、あの木をもみにもんだのです。すると、枝についてゐる、すべての葉が白い裏をかへして、ふるひ立つかと思つたかと思つたに、雲の中にかくれてしまつたこともありません。その時、

「あの木は、どうかならなかつたらうか。」

と、心配するほどのこともなく、また、たちまち、けろりと晴れた、水色の空の下に、なつかしい木は、こんもりとして、昔のままの姿で立つてゐたのでした。

夏も、やがて逝かうとする日のことでした。

「さあ、みんな飛んでごらん。あの野原の高い木のところまで！」

と、母鳥は三羽の子供たちに、自由に飛ぶことを許したのでした。

いまは、一人前となつた三羽の頬白が、野原の高い木立を目がけて、飛び立つたのであります。そして、その時、村を見、また、町を見、あちらの地平線から白くのぞいた、海をはじめて見たのであります。

三羽の子供たちは、日の暮れるのも忘れて、あたりを飛びまはつて、待ちにまつた自分たちの日が、つひに來たのを喜んだのであります。そして、お母

さんをおひ出して、藪の古巢ふるすに歸つてみると、どこにも、お母さんの姿は見えませんでした。

「お前たちが、ひとり立ちができるやうになつた時に、私は、お父さんの後を追つて行くから……。」

と、日頃言つたお母さんの言葉が、ひとりせに思ひ出されたのです。その時、野原の上の空には、赤い雲が火のやうに飛んで、その下には、黒く、櫛の木が、巨人きよじんのやうにそびえて見えました。

頭を下げなかつた少年

ある町に、クリスト教の會堂がありました。日曜日には小さな子供たちが、お話をさきを集まつたのであります。

お話をなさる先生は、まだ、若い女の人で、いろいろの遊戯いっぐをしたり、やさしい英語を教へたりして、ためになるところから、信者の家の子供たちだけでなく、ほかの子供たちまで来るやうになりました。

人間は、年をとるにつれて、ためになるお話をきいても、さほどに思はなくなり、また、女の先生などのなさる遊戯なんか、男の子たちには、つまらなくなるけれど、幼稚園を出て、小學校へ行つたばかりの時代には、正しいお話をきくと、ほんとうに感心をし、また、先生の教へには、よく従ふといふ、どれもみんないい子供たちばかりでありました。

だから、日曜になると、先生は、けふはどんな話をして、みんなの心を眞直まっすぐ

に導いたらいいかと考へなされたのです。正しいこと、善いことを人の胸に傳へることが、即ち神様のお心であつたからです。

この日、先生は、いつものごとく教壇けうだんに立つて、そこに集まつた、可愛らしい、兩方の頬ほを林檎りんごのやうに紅あかくして、何不自由なさうな子供を見まはしなから、

「この頃のやうに寒くなつても、みなさんは、晩にはあたたかなお蒲團ふとんの中はいつて休み、朝は、起きるともうちゃんと御飯ごはんのしたくがしてあつて、あたたかなお汁や御飯をおたべになるでせう。ありがたいと思はなければなりません。さあ、これからしばらく、神様にお禮を申してお祈りをいたませう……。」かう言つて、先生は、頭をさげて、神様にお祈りをし、そして、子供たちのために、感謝かんしゃなさいますと、前にならんだ小さな子供たちは、先生のなさるやうに、頭を下げてお祈りをいたしました。

先生は、みんなの心に、まごころが通じたのを喜んで、その可愛らしいお祈りをしてゐる姿を見ようと思いました。すると、みんなは、まるい頭を下げてゐます。が、ただ一人だけお祈りをしない子供があるのを見て、やさしい先生の胸は、おどろきと不審ふしんにどきどきはじめたのであります。

やがて、みんなのお祈りが終つた時、ひとりお祈りをしなかつた子供をさして、
「どうして、あなただけ、お祈りなさらないの？」と、先生は、顔をあかくして、お問ひになりました。

少年は、じつと、先生を見つめたままで、だまつてゐます。

「あなたは、ありがたくないのですか。」と、先生は、また問はれました。み

んなは、この時、その少年を見つめました。すると、その少年は、

「僕は、毎晩、うすい蒲團の中にちぢこまつて寝ます。お母さんは、僕や妹に、蒲團をかけて、自分は、かけないことがあります。朝、僕たちは、あたたかな御飯をたべることは、めつたにないのです。先生、神様は、いい人にめぐんで下さるのではないですか？ 僕のお母さんは、ほんとうにいい人です。それなのに、いつまでも困つてゐます。だから、僕は、神様にお禮なんか言はないのです……。」

124

と、何に感じたか、眼に涙をためて、先生に向かつて言ひました。

まだ年の若い女の先生は、はじめて聞く世の中の悲惨な有様にうたれて、すぐに返答することが、できなかつたのです。「どうして、こんな子供が、この教會へ、今日に限つてやつて來たのだらう？」といふ、疑ひが起りました。

「あなたは、どうして、ここへいらしたの？」と、先生はたづねられた。

見ると、その少年の服装は、みんなにくらべて、粗末でした。しかし、きちんと帯をしめて、利巧さうな子供です。この時、ならんで腰かけてゐた子供が

「先生、山田君は、僕がつれて來たのです。僕と學校では同じ級ですが、山田君は、よく出來ます。お母さんだけで、お父さんがないのです。それで、朝早く納豆を賣つて、うちの助けをしてゐます。けふ僕のところへ遊びに來たから、いつしよにここへお話をききに來たんです。」と、説明しました。その子供は、やはり頭のいい子で、いつもこの教會へ來るので、先生は知つてゐました。

はじめて、ここへ來た少年は、自分たちの生活をみんなに知られたので、恥

づかしく思つてか、また、みんなから顔を見られるのが氣まりがわるいのか、うつむきました。

先生は、うなづいて、二たび教壇の上に立つと、みんなを見て、

「みなさん、いまの話をおききですか。この世の中には、正しくて困るものがあり、また、ここにゐなされる山田さんのやうに、感心な方もあります。さあこんどは、さういふ方々が、神様のおめぐみによつて、平和に、幸福におなりになるやうに、みなさんと一しよに、神様にお祈りいたしませう……。」と、言つて、先生は、口のうちでお祈りをとなへて、頭をさげられました。小さな子供たちは、一しよに、かはいらしい頭を下げました。

みんなに祈られた少年も、その誠に對して、頭を下げずにはゐられませんでしたが。

しかし、そのあくる日から、やはり少年は朝早く起きて、納豆を賣つて歩かずにゐられないのでした。どこからも、救ひの手が來るといふあてもありませんでした。そして、お父さんのない、母と子は、働いて、働いて、貧乏と戦はなければ、生きて行くことはできなかつたのです。

彼には、みんな自分よりは、いい暮らしをしてゐる子供たちの集まりである教會堂へ行く氣は、そのち起らなかつたのでした。そして日曜になると、一しよに妹と遊んでやり、また、学校のおさらひなどをしてゐたのでした。

そのうちに、だんだん寒くなつて來ました。お母さんは、おそくまで夜なべをして、手内職てないしやくをなしました。お母さんが、ひとりひとりで起きてゐられると思ふと、少年は、床にはいつても、安心して眠ることができません。

「お母さんは、寒いだらうな……。」と、いろいろのことが氣になつて、あち

らを向いたり、こちらを向いたりしてゐました。そのうちに、いつしかうらととすると、はげしい風の音に眼がさまされました。まだ、室は明るく燈火がついてゐて、お母さんは起きてゐました。だが、ひどい風の音です。

「お母さん、ひどい風ですね。まだ、お母さんは、お休みにならないのですか？」と、少年は、あちらを向いて言ひました。

「ああ、もう休みます。」

かうお母さんは、返事をなさいました。それから、ぢき室は暗くなつて、お母さんが、お休みなされた様子に、少年も安心して、眠りに落ちました。それから、一時間ばかり後であります。けたたましい鐘の音が聞こえました。少年は、不意に眼をさまして、起き上がりました。あらしの吹く中に、鐘ははげしく鳴りひびいてゐたのです。

「火事だな」と、ひとり、外に出て見ますと、あちらの空が真紅でした。それは、ちやうど、いつか行つた教會堂のあるあたりのやうに見られました。

同時に、やさしい女の先生の姿が浮かびました。ついで、自分のために祈つてくれた、多くの子供たちの姿が浮かびました。

「あの先生は、教會堂のうしろの家に、住んでおいでなさると聞いた。そして、教會堂が焼けたら、みんなの、日曜日に行つてお話をきくところがなくなつてしまふだらう……。何か、自分の力で出来る手助けをしなければならぬ。」

かう考へると、少年は、火の見える方に向かつて飛び出したのでした。その時は、道の上が、もう混雑してゐました。やつと、その町に達すると、高い會堂の屋根は、まだ、火の子を浴びて、無事にそびえてゐたのです。

「まだ、焼けなくてよかつた。」と喜んで、少年は、そこへ駆けこみま
した。

すでに、そこには、信者の方々がたくさん集まつてゐました。女の先生の姿
も見えました。けれど、自分のほかに、小さな子供の姿は見えませんでした。

「先生、何か、お手傳ひをいたします。」と、少年が前に立つた時に、先生は、
びつくりしました。

「まあ、よく来て、下さいました。もう大てい大事なものは片づけましたから、
それに、風が變つたやうですから、大丈夫だと思ひます。」と言つて、少年を
抱き上げんばかりに喜ばれました。

教會堂は、焼けずに火事は静まりました。みんなが、ほつとした時に、先生
は、少年をそこにゐる人たちに紹介されたのです。少年が一家の生活を助ける

ことなどを聞かされた人々は、少年を賞讃いたしました。

神は、つひに正しき者の存在を知らずには置かなかつたのであります。

青空の下の原っぱ

「正ちゃん！」

いつも、誰か、あちらの原っぱで、自分の名を呼んでゐるものがあるやうな気がして、正二は、落ちついて、勉強をしてゐることができなかつたのです。

それに、この頃、お天気は、ばかにいいのでした。机を並べて、英語の復習をなさつてゐるお姉さんは、さつきから、横眼で、ちよいちよいと弟の様子を見てゐられました。そして、三四行も本を見て、むづかしい字をノートに書きとつてゐたかと思ふと、もうぼんやりとして本から眼をはなして、窓の方を見て考へこんだり、お尻をもぢもぢさして、鉛筆でこつこつ机の上を叩いたりしました。

「正ちゃん、何をしてるの？ さつきから見ると、ちつとも勉強に身がはいつてゐないのね。そんなことで、どうするんですか。」と、姉さんは、見かねていひました。

正ちゃんは、急に體つきをしゃんとして、

「考へてゐるんぢやないか！」と、怒り聲を出しました。

「うそを言つても、わかりますよ。はやく外へ行つて遊びたいのでせう。けれども、するだけのことをしなければ、出てはなりませんよ。」

姉さんは、きつくいひました。來年は、中學校へ入らなければならぬのに、ちつとも勉強をするといふ氣がなく、お母さんが、やかましく言つても、その時だけ、ききめがあるばかりで、すぐ忘れてしまふ。だから、姉さんが、そばにゐて、かうして強制的にしなればと、お母さんも、お姉さんも、考へてゐ

られたのでした。

だから、正ちゃんは、このごろ、誰よりもお姉さんが怖かつたのです。しかし、お姉さんのことであるから、もし、いけなかつた時は無理をいつても、また、けんくわをしても、どうにでもなるといふ氣持もありました。それで、何かしら、いひがかりをつけたかつたのです。

「誰が、遊びに行きたいなどと言つた。姉ちゃんは、そんなことを言つて、僕の氣をつつくんだもの、勉強なんかできやしない。」

正ちゃんは、これをきつかけに、今にも座を蹴立てて、飛び出してしまふやうに見えました。

姉さんは、自分の言葉一つで、かへつて、その手に乗らなければならぬと思ひましたから、急に、言葉つきを和らげて、

「さういつたのは、私がわるかつた。そんなら、落ちついて勉強しなさいね。」
と、言ひました。

正ちゃんは、眼に涙をためて、鼻聲はなごゑを出しながら、

「讀本をしたら、もう、いいんだらう。」と、ききました。

「算術は、今日、なかつたの？」

「算術なんか、あるもんかい。」

「ぢや、いまは、讀本だけでいいから、よくおさらひをして、むづかしい字
を書取つて覚えておきなさい。あとから、姉さんが聞いてみるから……。」と、
お姉さんは辭書じしょを引いて、自分は、英語に眼をさらしながら、答へました。

「正ちゃん！」

あちらの原つばの方で、誰か、自分を呼んでゐるやうな氣がしました。正二

は、どうかして早く飛び出したかつたのです。

「僕、みんな分つてゐる。お姉ちゃんに、きいてもらはなかつていいんだ
よ。」

正ちゃんは、かういつて、ぐりぐりと、鉛筆でノートの上へ、落書らくがきをしまし
た。

「お前は、誰のためだと思つてゐるの。こんどの試験に、この前のやうな成
績せきだつたら、中學へは入れないでせう。それでいいのかい。」

姉さんは、とうとう、こちらに向き直つて、弟をにらみながら、言ひまし
た。

「あちらの立雄たつおさんをごらん。お前のやうに、さう遊んでばかりいらつしや
るか。よくお出來になるといふのに、さういふ子供とは、お友達にならずに、

古道具屋の秀公とか、そんなやうな勉強ざらひの者とばかり友だちになつて、それで、偉い人になれると思つてゐるのかい……。」

まだ、何かいはうとするのを、正二は、みんなまで聞かず、

「あんな立公へいみたいなやつ、なにができるものか。姉ちゃんなんか、なんにも知らないんだから、だまつてゐれ。」

正ちゃんは、かういふうちにも、心は外の方へ飛んでゐました。しかし、どうしても勉強しなければ、姉さんが、出してはくれぬと分ると、こんどは、身をいれて勉強をしました。

三十分、一時間と、弟が學校から歸つてまだ遊びにも出ず、机に向かつて勉強をしてゐる姿を見ると、姉さんは、かはいさうになりました。そして、あまり、自分がやかましくいつたのを、悔ゆるやうな氣がしました。なぜなら、

この時分が、一ばん遊びたい盛りであるし、それがまた少年時代の、二度とはない幸福のやうに思はれたからです。

「正ちゃん、もういいから、ちつと遊んでおいで、ね。」

姉さんは、かう言ひました。

正ちゃんは、いま、自由に、あちらの原つばへ行くことができたのです。ここでは、仲間がグライダーを飛ばしたり、ボールを投げたり、ある時は、ペーゴマなどをまはしてゐるのでした。

廣い原つばに生えてゐる短い草は、もう枯れてゐました。肌をあらはした赤土は、みんなに踏まれるので固くなつてゐます。原つばの片隅のところに、ほつたて小屋があつて、そこは屑屋の立場となつてゐました。小屋の近傍には、籠を乗せた空車が、幾臺となく置きすてられることもありました。空場や、古

新聞や、不用になつた道具や、破れた襖ふすまのやうなものまで、取引されたので
す。その立場に集まる人たちは、いろいろの様子をしてゐました。筒袖つとそでの短い
着物をきたのもあれば、古洋服をきたもの、誰が見ても、だぶだぶで體からだに合は
ないのが分ります。帽子をかぶつた者、手拭で頬冠ほのかむりをした者、若い者もあれ
ば、老人もゐるといふ風でしたが、それらの人たちは、いつ集まるといふこと
なく、集まつて、わいわい言つてゐたかと思ふと、また、いつとなしに、どこ
ぞへか散つてしまふのであります。そして立場には、いつも同じ一人の爺さ
んが、留守居をしてゐました。

正三は、この爺さんと仲よしになりました。そして、そこに集まる多くの層
屋たちの顔は、よく見覺えてをりませんが、ただ一人、のつぼの青年とは、親
しく口をさきました。

この青年と口をさくやうになつたのは、正ちゃんまっちゃんが、秀公たちとボールを投
つたり、ベーゴマをまはしてゐる時に、青年が立つて見てゐたが、

「僕も、いれてくんねえ？　ねえ、僕も仲間なかまにしておくれよ。」と、彼が頼
んだのにはしまります。

遊んでゐた、みんなは、この、のつぼの青年を見ました。なんとなく、間まの
抜けてゐるやうなところが、親しみを感ぜさせたばかりでなく、自分たちより
大きなものを、競技きやうぎの中にいれて負かしてやることは、大いに面白いのであり
まし。

「ああいいよ。だけど、ずるいことしつこなしだぜ。」と、秀公が言ひました。
その時、ベーゴマを廻してゐた時でしたが、青年は、さつきから秀公のする
のを見ながら、ニヤニヤ笑つてゐたので、

「どつちが、ずるいか。」と、言ひながら、みんなの仲に加はつたのでありま
した。

正二は、立場のお爺さんも好きだつたが、また、この青年も好きでした。の
つぼで、間が抜けてゐるやうに見えたけれど、決して馬鹿なのではありません
ん。人がよくて、のきんでした。

「君、どうして、屑屋なんかになつたんだい。」と、正ちゃんがさくと、青年
は、まじまじと正ちゃんの顔を見て、

「他に仕事ほかをさがしたつて、見つからんからさ。」と、言ひました。

「屑屋は、まうかるかい。」

「今時、何をしたつて、まうかりなぞしないさ。」と、青年は答へながら、い
つまでも、子供と一しよになつて遊んでゐたのです。

正ちゃんは、彼には向上かうじやうしん心がないのだと思ひました。それにくらべると、秀
公の方が、いまにえらくなるやうに思はれました。二人は同じ學校で、同じ組
でした。立雄とも同じでありました。秀吉の家は、古道具屋で、お父さんはや
はり、屑屋です。正二のお父さんは雑誌記者をしてゐました。立雄のお父さん
は、會社の重役であります。三人の家の生活は、かういふふうがちがつてゐま
した。そして、一ばんよく立雄が出來、正二は中くらゐで、秀吉は一ばん出來
なかつたが、腕力わんりきよにかけては、何といつても、秀公が一番で、立雄は問題にな
りませんでした。

正ちゃんのお姉さんが、立雄のことをほめると、

「なんだい、あの青瓢箪あおべうたんが……。」と、正ちゃんは笑ひました。そして、お姉
さんが、

「お圃のお友だちは、あの道具屋の秀公ぐらゐのものだらう。」と、けなしますと、

「よけいなことを言はんでもいいよ。姉さんのお友だちではないからな。」と、正ちゃんは、秀公を辯護しました。

實際、のつぼと渾名のついた青年のいふやうに、秀公はなかなかずるい奴でした。ベーゴマをしてゐても、いまいましてなくなることはありません。たとへば負ける時にも氣持よく負けるが、「一つ貸してくれないか。」と頼みながら、調子よく勝ちはじめると、ぐんぐん勝つて、平氣で、みんなのコマをかつ渡つていつてしまふのです。

二

立場の前から、あちらを見ると、遠くの林の葉が落ちて、枝ばかりになつたのが、細かい網の目のやうに、うす黒く、青い空の下につづいてゐました。そして、いくつもの村落や、田畑を越して、地平線の彼方に、國境の山脈が、うねうねと頭を揃へてゐるのが見えます。もうその山には、雪が來てゐました。吹いて來る風の寒いのは、おそらくその山を越して來るからでせう。

靴下をはかずに、破れた靴をはいて、野良犬の白い頸つ玉を抱いて、秀公は何か犬に言つてゐました。そこから、少しへだたつたところに、正二は、ぼんやり立つて、遠い山の方をながめてゐました。

「秀公、もう、あつちの山には、雪が來たんだね。」と、言ひました。

秀吉は、いまはじめて、お前はそれに氣がついたのかといはぬばかりに、
「どうぞ、もう冬ぢやないか？ 正ちゃん、スケート遊びをしようよ。」と、

秀公が、言ひました。

「スケートなんか、もつてゐないもの。」

「あんなの、ぢき造れるさ。車さへありやあ、どうさないんだぜ。」

「君、この往來を走るのかい。」と、正ちゃんはさききました。

「スケートは、氷の上をすべるぢやないか。町へ行つて、アスファルトの上を走るのさ。」と、秀公は、答へました。

「危ないだらう……。」

「すつころんだら、頭を打つばかりさ。」

「頭が、われないかい。」

「えらく打てば、われるだらう。」

「僕、そんな遊びするのはいやだ。」

「意氣地なしの、正坊主。」

「なんだ、秀公の出目助。」

「なに。」

「なに。喧嘩しようか。」

二人が、むづと、とつくみあひをはじめると、白が、わん、わん、けたたましく吠えは、めました。この時にかぎつたことでありません。仲のいい二人がかうして組打をは、めると、二人に可愛がつてもらつてゐる白は、ちやうど、人間なら、「けんくわをしては、いけない！」といつて仲裁するやうに、氣をもみはじめるのであります。

「だまつてろー」と、正ちゃんは、秀公の髪の毛をつかみながら、足をひろげて、白を蹴るまねをしました。鼻をたらしした秀公は、がっちりとした體つき

で、りやうまた兩股をひろげて、足に力を入れて、正二の胸のあたりに喰ひ下がつてゐました。

あまり外がさわがしいので、小屋の中からお爺さんが、顔を出しました。そして秀公と正ちやんが、組合つてゐるのを見ると、

「あ、けんくわするでない、けんくわするでない。よしした、よしした！」と言ひながら、走つて來ました。

「二人は、仲がよすぎてけんくわするんだ。いま、おぢいさんが、火を焚くから來てあたんな。」と、言つて、おぢいさんは、二人を分けてくれました。

二人は、はあ、はあ、息づかひを荒くして、顔を赤くしながらも、もう笑つてゐました。そして、お爺さんの、後からついて行きました。白は、喜んで尾を振つて、秀公と正ちやんに飛びつきました。正ちやんは、歩きながら、犬の

頭をなでてゐました。

お爺さんは、小屋の横手の柿の木の下で、あきたはら空俵に火をつけて、あたりに散らばつてゐる埃ほこりを集めて焚きました。青い煙が、ゆるやかに風になびいて、正ちやんを包んだかと思ふと、秀公の方に行き、やがて、まっすぐ真直に、もくらもくらと上がつて、もう、葉のなくなつてしまつた柿の梢こやぶをかすめて、空に消えてしまふのでありました。

二人は、火にあたりながら、お爺さんと話したのであります。

「お爺さんは、東京で生まれたの？」と、正二がささました。

「私の國は、ずつと田舎だ。」

「雪がたくさん降る？」

「山國だから、たくさん降るとも。もう、二三次も降つたり、消えたりした

らうが、いつも二月時分になれば、四五尺くらゐもあるのだ。」と、お爺さんは、皺しわのよつた手を火にかざして、煙に顔をしかめながら答へました。

子供たちは、その知らない、雪のたくさん降る田舎の、いろんなことが知りたかつたのです。

「おぢいさんは、スキーに乗つたことがあるかい。」と、秀吉が、ききました。

おぢいさんは、火をかき直して、

「おぢいさんの子供の時分には、まだ、スキーなどといふものはなかつたのだ。どこへ行くにも雪靴をはいて、かんじきといふものをつけたものさ。みんなは、雪靴といふものを知るまいな。藁わらで編あんで造つたものだ。いまは、女も子供も、スキーに乗つて、山でも谷でも滑すべつてゐるが、私などは、稽古けいこしたこ

ともないし、乗れもせん。よく、まあ、あんな長いものを足につけて歩けるものだと感心してゐる。ああして、人間が山の中や、谷へはいるものだから、このごろでは、狼おほおかや熊といふやうなものは、だんだん奥へはいつて、めつたに居らなくなつたが、私の子供の時分には、冬になると、山に餌えさがなくなつて、里の近くへやつて來たもんだ。」と、お爺さんは言ひました。二人は、眼をまるくして、お爺さんの話をきいてゐました。

「お爺さんは、狼や熊を見たことがあるかい？」と、正ちやんが、たづねました。

「私は、見たことがないが、私の村の者で、雪の降つてゐる山路やまぢを歩いてゐて、狼に出あつたものがあつた。その人は、村で佛様といはれるほどの、いい人でな。」

「おぢいさん、そして、どうした？」

「その人は、もう狼に食べられるものと思つてしまつた。そして、覺悟をして
念佛ねんぶつを唱へて、あたりまへに歩いて行つた。すると、狼は、道を避けて、じ
つと林の間から、恐ろしい眼をして、その人をにらんでゐた。その人は、前を
通る時、狼に向かつて、どうか助けてくれといつた。で、いまにも狼が飛びつ
いて来て食はれるかと思つて、また、念佛を唱へながら行くと、狼は五六間ば
かりうしろから、その人の後をつけて、見送るやうについて來たが、あちらに
村が見えるところになると、いつ、どこへ行つたか、姿を消してしまつたさう
だ……。」

お爺さんが、その話を終ると、「ふうん」と、正ちゃんは、ため息をつきまし
た。二人は感心しながら、話をきいて、雪國の景色けしきを想像したのであります。

火は消えて、あとにくすぶる青い煙だけが上がりました。

あちらを見ると、のつぼの青年が、空壇かき壇のはいつた籠かごを傍かたはらにおいて、枯草かれくさの
上で、日向ひなたぼつこをしてゐました。二人はその姿を見つけると、驅け出して行
きました。

「キヤツチ・ボールをしない？」と、秀吉は、青年に聲をかけました。

「ああ。」と、彼は、氣のない返事をしました。

「僕、家へ行つて、ボールを持つて來るからね。」と、秀吉は、原つばをあち
らに走つて行つた。ちやうどこの時、反對の空の方から、飛行機のプロペラの
うなり音がきかれたのであります。

「飛行機だね。」と、正ちゃんは立ち上がつて、そのうなりのする方を見まし
た。飛行機は、だんだん大きく、近づいて來ました。そして小さく人形ぐらゐ

に、乗つてゐる人の姿が見えるほどになると、何か撒いたと見えて、細かな、黒い粉のやうなものが、ひとかたまりになつて、ちらちらと落ちて來ました。「何か撒いた！」と、正ちゃんは落ちて來る方へ駆け出しました。つづいて、のつぼが、飛び上がつて走り出すはずみに、籠を蹴つて、中にはいつてゐる空壇を、二本ばかり碎いてしまひました。

ピラは、町はづれに、小さな家をごちやごちや建てこんでゐるあたりへ落ちて來ました。みんながそれをねらつてゐたものと見えて、方々から、大人や、子供が出て來て、落ちて來るピラを奪ひ合ひました。正二は、それでも、二枚ばかりつかんで、急いで原つばへ戻つて來ますと、「なんだい。」と、青年が、色のあせたオーバーの襟に、頸を埋めてききました。

「活動のピラだけど、十圓の懸賞金のあるすてきなんだぜ。この番號が當ると

いいけどな……。」と、正ちゃんは、二枚のピラを、青年に見せました。すると、青年の眼は、かがやいて、

「これ、くれないか？ もし當つたら、君に半分あげるよ。いま駆け出さうとして、壇二本破つちやつたんだからな。」と、青年は訴へました。

「損しちやつたね。壇二本でいくらするの？」と、正ちゃんは、破れた空の酒壇をながめてききました。

「三錢で買つて來たんだ。ねえ、ピラくれない？」

「ああ、やつてもいい。だけど、あたらないかも知れないぜ。」
「どうせ、あたりつこないさ。」

「三錢損しちやつたね。」と、正ちゃんは、何となく、寒さうにしてゐる青年に、同情しました。青年は、ピラを大事さうに、ポケットの中に、しまひまし



た。
そこへ、秀吉が、白と一しよに走つて來たのです。
「正ちゃん、ピラを拾つた？」
「ああ、二枚、君は？」
「拾はなかつた。」
「もし、一等が當つたら、みんなにおごるよ。」と、青年がいふと、秀吉は、
「旅費ができたなら、田舎へ歸るのだと言つてゐたぢやないか。」と、それを打
消すやうに言つたのでした。

三

立雄さんは、めつたに原つばなどへ遊びに行きません。それは古道具屋の秀

吉や、立場に集まる屑屋などを相手にして、キャッチ・ボールをすることを、お母さんが、かたく禁じてゐたからです。

それで學校から歸ると、裏のお庭に造つてある、砂場や、すべり臺で、妹たちを相手にして遊んでゐました。

ある日、立雄のお母さんは、正二の家へやつて來られました。

「どうも、このあたりには、いいお友だちがないので困つてしまいます。外へ出れば、いいことを覚えませんし、家にばかり置いて、勉強もさせられませんし、どうか、正二さんに、たまには、お遊びにいらしつて下さいまし。お互ひに分らないところなど、教へあへばいいと思ひますから……。」と、言ひました。

正二のお母さんは、けんそんして、

「お宅の立雄さんは、たいそうよくお出来になりますさうで、結構でございます。うちの正二は、ちつともいふことをききませんで、學校から歸ると、おさらひもせずに、飛び出してしまふのです。こんなことで、來年は中學へはいれるか知らんと、姉が氣をもんでゐるのですが、御當人はちつとも、その氣がないのでございますよ。よく立雄さんのやうに、勉強しなければならぬといひさかせますが、何ほど勉強がきらひなものか、コマだとか、飛行機だとかいつて、原つばへばかり行つて、遊ぶやうですが、感心に立雄さんは、外へ出たがりなさいませぬね。」と、言はれました。

「うちで、やかましく、あんな下卑た古道具屋の子や、屑屋などと遊んではいけないと、言ひさかせますので、そのかはり、庭にすべり臺も、砂場も造つてあるのです。どうか、正二さんに、お遊びにいらしつて下さるやう言つて下さいまし。」

「うちのは、お行儀が悪うございますが、ぜひうかがはせます。こんな狭い家ですけれど、立雄さんにも、どうぞお遊びにいらしつて下さるやうに、おつしやつて下さいまし。」

この、お母さんたちの話を、隣の室で、お姉さんと正二は、並んで机に向かつて、耳をすましてきいてゐました。やがて、立雄さんのお母さんが、門の戸をあけて、歸つて行く足音が遠ざかると、

「正ちゃん、お前も、もつといいお友達と遊ばなければだめだよ。いつも、お前の遊ぶお友達は、秀公ぢやないか。あんな出来ない子と一しよになつてゐては、お前も出来なくなつてしまひますよ。」と、姉さんが、言ひました。

正ちゃんは、姉さんの言葉に、反感をもちました。そして、暗に、立雄君を

ほめてゐることが分ると、

「あんな青瓢箪、なにができるもんか。」と、言ひました。

「級長なら、でゐるぢやないの。」と、姉さんは、弟をにらみました。

「あすこの婆ばあみたいなのやつありやしない。よく學校へやつて来て、そして先生に、べちやくちや言つてるんだ。自分の子は、よつほどできると思つてゐるんだよ。」と、正二は言ひました。

「婆つて、誰さ？ 立雄さんのお母さんのこと？ そして、先生に何といふの……。」

「そんなこと分らないが、きつと、自分の子はどうですかときくんだらう……先生は、頭をぺこんぺこん下げてゐるのだよ。みんな、婆が、先生の家へ、何か持つて行くから、ひいさしてゐるのだと言つてゐるよ。」と、正ちやんが、

また、言ひました。

「そんなことあるもんですか。立雄さんが、よくできるから、他ほかの子が、そんなことをいふのです。分りもしないくせに、そんなことを言ふものではありませんよ。」

「ぢや、姉ちゃんは、さうでないといふことが、分つてゐる？」

「ええ、分つてゐます。」

「ひとが遊びに行くと、すぐに婆が出てきて、誰が組で一番できるとか、正二さんは甲ばかりでせうとか、どこの中學を受けるのだとか、そんなことばかりきくんだから、面白いことはちつともない。誰が、あんな家へなんか遊びに行くものか。」

「なんといはれたつて、立雄さんが出来るから、仕方がないさ。だけど、そん

なことをさくのかい？」

正二の姉さんも、いささか、あざれた顔をなさいました。

「立雄さんのお母さんは、勉強のこと、やかましいんだらうね。」

「あの調子では、やかましいだらう……。」

「生意氣ね。うちみたいに、自由主義でもいはないけれど。」

「だけど、うちの姉さんみたいに、意地悪くはないだらう。」

かう、正ちゃんが言つたので、姉さんは怒つて、いきなり、正ちゃんの體をつねりました。

「痛い！」

「お止し、お前がわるいぢやないか。」

ここで、一騒動が、はじまつたのでした。

その日の、午後のことです。

正二が、外で遊んでゐると、立雄が、

「正二君、遊びに来ない。飛行機を見せるから。」と、呼んだのでした。

飛行機と聞いたので、正ちゃんは、急に行つてみる氣になりました。日曜日など、原っぱは、飛行機を飛ばす子供たちで、賑やかです。この間から、正ちゃんも、いくつ飛行機を造つたか知れません。しかし、まだ競技會に持ち出しでもないやうに、よく飛ぶのは、秀公にも、自分にも、できないのでした。

「どんな飛行機？」と、正二は走り寄りながらききました。

「遊びにおいでよ、見せるから。」

立雄は、先にたつて、自分の家の大きな門にはいりました。敷石の上は、きれいに洗はれて、泥の跡すらついてゐません。いかめしい瀬戸の表札がかかつ

てゐます。立雄は、正面の玄関口からはいらずに、脇わきについてゐるもう一つの、小さな玄関からはいりました。

「こちらから、おはいりよ。」

正二は、だまつて、あとについて行きました。

「はやく、飛行機をお見せよ。」

正二は、上がらずに、入口に立つて言ひました。

奥から、立雄のお母さんが來られました。眼の落ちこんだ、髪かみの毛のちぢれた、見るから、この小母おはさんを、正二は好かなかつたのです。

「まあ、お上がんさい。」と、小母さんにははれて、正二は、上り端はなの三疊さんじやうの間に坐りました。そこに火鉢かひが置いてあつて、小母さんは、奥から、座蒲團ざぶとんを持つて來られました。

「正二さんは、學校で豫習よしゆをなさいますか。なさらない？ なさる？ ……さうですか。おうちに、いい姉さんがあつて、見ておもらひなされて、仕合せでございますね。」と、小母さんは言はれました。

こんな話を、正二は好まないのです。どうでもいいので、自分は姉さんに見てもらふのを、うるさくこそ思へ、決して、仕合せともなんとも思つてゐなかつたからでした。けれど、小母さんには、そんなことはいへず、ただ笑つてゐました。

それでも、すぐ小母さんは、奥へはいつたので、うれしかつたのです。立雄は、りつばな飛行機を持つて來ました。第一、造りが精巧せいこうで、翼よくが長く、機械が完備くわんびしてゐます。それは、正二や秀公が、木片きざを削けつたり、青竹を破わつたりして、造つたものとは、比較ひかくにならなかつたのです。

「いい飛行機だなあ。」と、正二は感嘆かんたんしました。

「どしたんだい。買ったのかい？」

「お父さんが、どつからか、買って来てくれたのだ。」

「いい飛行機だな、よく飛ぶだらう。」

正二は、手にとつて、空を飛ぶ時分の形を、頭の上で、いろいろにしてみながら言ひました。

そこへ、小母さんが、お菓子を二つの皿にいれて、めいめいの前に置いて下さいました。二人が、飛行機を持ち出して、夢中むちゆうで話をしてゐるのを見て、

「立雄や、こんな風のある日に、原つばで飛ばすと、すぐにこはしてしまふよ。」と、奥へはいりがけに注意しました。

(やな婆やなばだな)と、正二は思ひました。

「君、飛ばして見たかい？」と、正二は、ききました。

「まだ、飛ばしたことがない。」と、立雄は、正二の手から、大事さうに、飛行機を受取りながら、答へました。

「飛ばしてごらんよ。」

正二は、歸らうとしました。立雄は、門の外まで送つて出ました。その時、勝手許かてもとの入口のところ、十七八になる頬ほの赤い女中が、下を向いて、しくしく泣いてゐるのを見ました。

「あいつ、いやしいんだよ。買ひ喰ひしたり、あつまみなどするから、お母さんに叱られたのだ。田舎へ歸してしまふつて。」と、立雄は憎々にくしげに言ひました。

正二は、なんとなく、氣づまりな、むにくい家のやうに感ぜられて、門から

一步外へ出ると、晴れ晴れした、解放されたやうな氣持がしました。

正二は、原つばへ行きました。そこには、秀公が待つてゐました。自分の造つた飛行機を手に握つて、ゴムに紐をかけて、飛ばさうとしてゐます。

「正ちゃん、どこへ行つてゐたんだい。さつき、呼びに行つたのだよ。」と、につこりしました。

四

正ちゃんは、のつぼの青年から、貝の化石をもらひました。おそらく、この地球の若かつた時分の遺物でありませう。これを手にとつて、つくづく見てゐると、不思議な氣がしました。青年は、どこでこの化石を手にいれたか知りません。

「これは、僕、大事にしてゐたんだぜ。」と、言つてゐたから、ほんとうに彼が大事にしてゐたものでありませう。

原つばの立場の前に遊んでゐた時、青年は、これを正ちゃんにくれました。

「ほんとうに僕に、くれるのかい？」と正ちゃんがさくと、

「ああ。」と、答へました。

「君、この間の懸賞、何等のかに當つた？」と、さきました。もしかすると、そのお禮で、この化石をくれたのでないかと思はれたからです。

「う、うん、あたりやしない。僕、田舎へ歸るから、君にあげるのだ。」と、年よりは子供らしく見える青年は、言ひました。

「さうかい。もう、東京へ來ないのかい？」と、正ちゃんはさきました。

「どうなるか、來たつて、もう、こんな職業はしないよ。」

「いつ、田舎へ歸るの？」

「いつだか分らんが、近いうちに。」

かうして、正ちゃんは、別れたのですが、家に歸つて、青年のことを思ひ出すと、なんとなくさびしい氣がしました。そして、もらった蛤貝はまぐりがひの化石を机の上のせて、じつと見入つてゐました。

「お前、どこからこんな化石なんか、もらつて來たの……。」と、姉さんが見つけて、珍らしさうに、指でころがしながら、さきました。

正ちゃんは、立場へ來る青年のことを話したのです。不景氣ふけいきで、失業者しつげふしゃがたくさんで、さがしても仕事がなく、その青年は、屑屋をしたが、それもうまくゆかないので、田舎へ歸るんだといふことを話しました。

「どんな人、いい人？」

「それは、いい人さ。」

「お前が、ピラをやつたお禮にくれたの。」

「さうぢやない。お別れにくれたのだよ。」

姉さんは、だまつて考へてゐましたが、少年たちの間に交はされた、美しい友情を、感ぜずにはゐられなかつたのです。そして、何となく、哀れに思ひました。

「お前も、何かあげればいいに……。」と、姉さんは言ひました。

正二も、いま、そのやうに思つてゐたのでした。しかし、やるやうなものが、考へても考へ出せないのです。

「なんにも、やるやうなものはないもの……。」と、正ちゃんは、机ひきだしの抽斗ひきだしをあけてみながら、言ひました。

「鉛筆でも、なんでもいいだらう……。」

「読んでしまつた、雑誌をやらうか。ああ、新しい今年の日記をやらう。」

正ちゃんは、まだ書いてない新年の日記帳を、本立の本の間から、引出して言ひました。

これと前後して、かういふことがありました。

秀公は、正ちゃんから、立雄がすてきな飛行機を持つてゐるときいたので、平常は、めつたに遊びに行つたことはないが、どんなのだらうと、見たいばかりに、立雄の家へやつて來ました。

「立雄君。」と、秀吉は、門のところ呼びました。けれど、誰も返事をしなかつたのです。

「立雄君、遊ばない？」と、彼は、家の方を向いて叫びました。けれど、やはり誰も出て來なければ、また返事をしませんでした。秀吉は、日ごろから、立雄が、なるだけ、自分と遊ばないやうにしてゐるのを知つてゐました。けれども、もう一度、呼んでみたのです。

「立雄君、ゐない？」

すると、窓の戸をあけて、立雄が顔を出して、

「あとで。」と、「言いつて、すぐに顔を引込めて、戸をしめてしまひました。

その様子から察すると、さつきから呼んでゐるのが、聞こえなかつたのではない。自分を避けてゐるのだといふことが、秀吉にわかりましたから、無上に腹が立つたのです。

「生意氣だなあ、青瓢箪の奴……。」

秀公は、泥だらけの靴で、磨きたてであつた門の扉を蹴りました。そこだけ

が真黒に汚れたのです。彼は口笛を吹いて、両手をズボンのかくしに入れて、原っぱの方へ歩いて行きました。

この話をも、正ちゃんが、お姉さんにしたのです。

「やな子だね、秀公は。」と、お姉さんが言ひました。

「なぜ秀公が、悪いのだい。立雄君が悪いぢやないか？」と、正ちゃんは、自分のことのやうに顔を赤くして、姉さんに喰つてかかりました。

「だつて、遊ばないからつて、そんな亂暴をするなんてさ。」と、姉さんが言ひました。

「誰だつて、聞こえても、聞こえないふりをすれば、怒るにきまつてゐるだらう。」

正二は、立雄のやうな、ああいふ家では、さういふ風に人を馬鹿にすること

を、何とも思つてゐないが、秀公のやうな、ああいふ貧しい家の人は、決してそんなやうなことをしないと信ずると、一そう、姉さんのいふことに、承知しかねたのです。

「いつたい、ブルジョアには、さういふところがあるんだよ。」と、姉さんは、自分にも分つてゐるやうに言ひました。

「ぢや、秀公が悪くないだらう。」

姉さんは、黙つてしまひました。雨の降る日は、ことさら日はやく暗くなりました。天氣のいい日には、青空の下の原っぱには、もう春が、すぐやつて来るやうな氣がして、子供は凧を上げ、小犬は飛びまはつてゐましたけれど、雨が降つたり、曇つたりする時は、さすがに一人の人影もなく、悲しさうに風が吹いて、草の葉が鳴つてゐるばかりであります。

「今日は、誰の姿も見えないこと。」

正二の姉さんは、原つばを横切つて、電車道の方へ行く時に、野原を見まはして、かう思ひました。そして、坂を下りかけた時、下の方から、一臺の車にいろいろな、がらくたものに乗せて、年とつた男が引き、うしろから子供が押して來るのを見ました。

姉さんは、何の氣なしに、通り過ぎようとする時、その子供は、帽子をとつて、挨拶あいさつをしました。

「まあ、秀ちゃんなの。」と、彼女は眼をみはりました。子供は、いい血色けつしよくの顔に、笑ひを浮かべて、また、両手で車を押しながら、坂を上がつて行つたのです。

この様子を見た姉さんは、秀吉が、立雄よりも、正二よりも、また他のいい

暮らしをしてゐる家の、どの子よりも感心な、いい子だと、心のうちで思ひました。

姉さんは、家へ歸つてから、正ちゃんに向かつて、

「お前なんか、かうして火鉢にあたつて、おやつが少ないとか、なんとかいつてゐるけれど、秀ちゃんは、お父さんの手助けをして、この寒いのに、車の後を押して、働いてゐなさるのだよ。ほんとうに、感心しちまふわ。」と、言はれました。

「姉さんは、秀公なんか、わるい子だから遊んでいけないつて、いつも言つてゐるぢやないか？」と、正ちゃんは、叫びました。

「私が、悪るかつたわ。」と、姉さんは、いまままでいつたことを、取消しました。

先だつては、屑屋をしてゐた、知らない青年のやさしい心持にうたれた姉さんは、やつと、原つばが、美しい子供たちの遊び場であつたことが、分つたのです。その時、正二は言ひました。

「姉さん、僕、秀ちゃんの、お姉さんをえらいと思ふな。お母さんがないから、お勤めに行く前に、お晝のご飯のお菜までこしらへて行くのだよ。そして晩方歸つて來ると、お洗濯をして、お母さんのすることを、みんなするんだもの。僕、つくづくうちのお姉さんより、秀公のお姉さんの方が、えらいと思つたよ。」

これをきくと、お姉さんは、だまつてゐました。そして、しばらくしてから、

「ほんとうに、働く人がえらいんだよ。人間はみんな、一度は働かなければならないのだからね……。」と、答へられました。

正ちゃんは、立雄さんの家の女中のことを思ひ出しました。同じ働くにしても、秀吉の姉さんは、なんと活々してゐることだらう。そして、立雄のうちの女中は、なんといぢけてゐることだらう。

「姉さん、おなじ働くにも、女中なんかになるものでないね。」

「そんなことないわ。労働にかはりはないことよ。」

姉さんは、さう言はれたけれど、正ちゃんは服しませんでした。

「だつて、旦那様とか、奥様とか、お坊ちやまとかいつて、頭ばかりこへこ下げて、たまに自分のお金で、買ひ喰ひをしたからつて、叱られるだらう。女中なんて、ちつともいいことありやしない。」

「さういふお家ばかりでもないよ。だから一がいには、いへないのよ。」と、

姉さんは言ひました。

「立雄君の家の女中は、かはいさうだな。」と、正二は思ひ出していひました。けれど、姉さんは、だまつてゐました。姉さんが、だんだん見え坊の金持よりも、貧乏でも裏表のない生活をする人々の方が、いいといふことを、わかつて来たのが、正二には、何より嬉しかつたのです。

五

正二は、新しい日記を青年にやらうと、懐にいれて、いつも空しく歸らなければなりません。それで、ある日、お爺さんに、あの若い人は、もう来ないのだらうかとたづねると、

「風でも引いて臥てゐるかと思つたが、かう見えないところをみると、故郷へ

歸つたかも知れないな。」と、お爺さんは答へました。

「お爺さん、田舎と、東京と、どちらがいいんだらうね。」と、正二がききま

した。

「田舎は、のんきで、暮らしいところになつてゐるのだが、今年は、不景氣で、東京よりもひどいといふから、歸つても面白いことはないだらうな。それに、所によつては、不作だつたといふから、さういふ地方は、なほさら、いいことはない。私は、子供の時分に、たいへん作のよくない年があつて、娘たちは、機の工場へ年期で賣られて行き、女、年寄まで内職に繩をなつたり、草鞋をつくつたり、畑には青い葉といふものが、一つばも残さずに取りつくされ、芋の皮まで捨てずに食べた年があつた。その時、私は、雪の降る中を池へ行つて、小さな蝦をとつたり、雑魚をとつたものだ……。」

「お爺さんが、いくつの時分だったの。そして、雪の降るのに、池の中へはいつたの？」

「ああ、さうだよ。」と、お爺さんは、遠い昔の日を思ひ出すやうに、うなづいて見せました。

「お爺さんは、子供の時分、釣をしたり、魚をすくふことが大好きだったから、他の人にはとれなくても、よく、お爺さんのいれてある網あみには、魚がはいったのだよ。」

お爺さんは、さう前置きをして、自分がその時、魚をとった様子を物語りました。

「雪のちらちら降る、寒い風の吹く中を、すくひ網をかつぎ、びくを下げ、それに、カンテラの用意をして行つたものだ。池の中には、雪がたまって、どこ

が水だか分らなくなつてゐる。そこを雪搔ゆきかきで掘り下げて、網の上げ下ろしの出来るだけ、水面をさぐり出して、日の暮れるのを待つて、カンテラに火をつける。すると魚たちは、火を慕したつて、そこに寄つて来るのをすくひ上げるのだ。」

「お爺さんは、それを町へ持つて行つて、賣つたのかい。」と、秀吉がききました。

「さうだ。それで、お米は高く買って買へないが、麥や豆を買つたのだ。」

「お爺さんは、僕たちくらゐだつた？」と、正二は、ききました。

「もう少し大きかつたかな、十五六の時分だった。」

二人の少年は、しばらく、だまつて考へこんでゐました。もし、自分たちがそんな目にあつたら、はたして、どんなことができただらう？ かう、二人はめいめに心の中で思つたのでした。